

暴
君

ギュンター・ジークリング

川本多紀夫

登場人物

ギュンター(ギュンター・フォン・ジークリング)

領邦フエルゼンスドルフの君主(オットー公の長男)

イザベル

ギュンターの姉(オットー公の長女)

カロリーネ

ギュンターの妻

ディートリッヒ(エドゥアルト・フォン・ディートリッヒ)

領邦の宰相

オイケン(リヒャルト・フォン・オイケン)

領邦の官房長

ヴィーラント(ヨアヒム・フォン・ヴィーラント)騎士

アルベリッヒ ギュンターの侍従(後に侍従長)

クラウス 警護隊士官(ストア学派)

フランツ 警護隊士官(エピキヨス学派)

クルト(クルト・フォン・ヴァイスバッハ)老貴族

シュヴァルツ(エルнст・フォン・シュヴァルツ)領邦議會議長

ヴァルター(ヘルムート・フォン・ヴァルター)警護隊指揮官

アルノルト(ロベルト・フォン・アルノルト)鷹狩りの貴族

ホルスト オイケンの部下

カール ギュンターの召使い

マルタ カールの妻

道化

刺客

老人 キリスト教の信者

ミヒヤエル 鷹匠

ルーカス 博労の徒弟

パルツェ 運命を司る女神たち

黒い影

貴族議員たち

警護隊の隊員たち

舞台は、中世一五世紀末のドイツ南部の、仮想のある一領邦フエルゼンスドルフ

第一幕

第一場

あたり全体が薄暗く、ひとところだけが、ぼんやりと明るむところに、運命の女神パルツエの、不気味な三人の黒い影が、座つて糸を紡いでいる。しばらくして、糸を紡ぎ、より分け、糸を切るそれぞれの手をとめて、声を合せて陰気な声で歌うように語る。

「今より三年の後の、秋の暮れ。ギュンター・ジークリング」

明かりが次第に暗くなるにつれて、声が遠のきながらもう一度、女神たちの中でもつとも声の低い一人が、不気味に語る。

「今より三年の後の、秋の暮れ。ギュンター・ジークリング」
声が消え去ったあと、やがてまわりが、すっかり暗くなる。

第二場

日が暮れる砦の城の、満足に家具らしいものも見当たらない、寒々とした粗末な部屋の中。

イザベルがただ一人。

歩きまわりながら、怒りの調子で何ごとか愚痴つている。

呼び鈴を鳴らすが、誰も応えるものがいない。

イザベル 荘園の館から引き立てられて、人里離れた荒山の砦の中のみすぼらしい窓も満足はない、薄汚い部屋に閉じ込められようとは。

聞こえてくるのは、野山を吹き抜ける風の音ばかり。

雨風が荒れる夜は、山の奥の方で、不気味な山鳴りが蛮族が叩くドラムのように、砦の塔のまわりを飛び回つて鳴き騒ぐカラスの声は、闇の底から泣き叫ぶ大勢の人の悲鳴のように聞こえる。

(ため息をついて) 父上や母上と一緒に、宮殿の中で暮らしたころが懐かしい。

わたしが若くして嫁いだシュテファン様は、少し女たらしのところはあつたけれど、陽気で大らかなたちのお人だった。

それが、あまりにも早くお亡くなりになつた。

あのころを思うと、この闇でさえ、ひととき明るむように思える。

それがいまは、黒々とコウモリが飛び交う、まるで洞窟のような部屋のなか。こんなに寒いというのに、いるのは気の利かない老婆のような女ばかり。

暖炉に火をつけるように呼んでも、いつこうにこようともしない。

（声の調子を変えて） それにしても、憎らしいのは、我慢のならないのは、あの愚か者のヘルマン。

おまえが失敗をしたおかげで、とんだ羽目になってしまった。

（苛立つて） あれほど、用心深く、慎重にことを運ぶよう言つておいたのに。手落ちなどというよりも、あまりにも馬鹿らしい失態だ。

運命の女神パルツェたち、弟に味方したのね。

復讐の女神エリーニュエス、御身は私を兄弟殺しの咎で罰しようとするのね。

でもそれは、まちがつているわ。

行為は、成功しなかったのだもの。

それはなかったことと同じ。

それなのに弟には、復讐の思いを遂げさせた。

わたしの、たつた一人の子のコンラートと、甥のヘルマンを斬首の刑に処して、わたしにはこのような目にあわせるとは。

それにしても、（立ち止まって） 憎らしいのはヘルマンのやつ。

もう少し骨のある者かと思つていたら責められる前に自白をしあつた。

あのこづるい女狐めのカロリーネ、弟のギュンターを唆して、よくもわたしをこのよう目に会わせたわね。

とつぜん、部屋の外から足音が近づき、武具を付けた三人が案内もこわずに、無言でいきなり部屋に押し入る。

イザベル （ぎょっと驚いて） おまえたちは何者です。
いきなり、許可もえず、婦人の部屋に押し入るとは。
名を名乗り、用向きを言いなさい。

三人、無言のままイザベルに近づき、捕らえようとする。
イザベル、ソファの反対側にまわり、手で制する。

イザベル このわたしを、誰だと思っているの。
オットー先君の息女。

先君の後を繼ぐはずだったいまは亡き、シュテファン様の妻。

おまえたち。

相手にできるとでも思つてゐるの？

三人、無言のまま近づき、イザベルを羽交い締めにして口を塞ぎ、一人が短剣で刺し殺して、部屋から運び去る。

あたりは、何ごともなかつたように静まりかかる。

第三場

領邦国家の君主、ギュンター・ジークリングに対する謀殺が失敗した後のある日。

イザベルが殺害されたことは、まだ知られていない。

貴族の館の一室。

貴族1 このところ、ギュンター殿下には宮殿に姿をお見せにならぬな。

貴族2 あの騒動があつてからだ。

貴族3 何しろ、暗殺という殿下にとつては、思いもしなかつたことだつたろうからな。

貴族4 襲撃に失敗をして、現場で取り押さえられたヘルマン殿が、実行犯であることは事実だが。

貴族5 ヘルマン殿の白状によればだが、この事件の黒幕は、ほかならぬ実の姉君にあたる、イザベル様ということだ。

貴族1 そのイザベル様は、もつかのところ山の砦のヴィルデ城に幽閉されている。

貴族2 それに、これもヘルマン殿の白状によると、事件は、隣邦のヴィルトベルクからの介入があつたことは確かだ。

ことの直後に、彼の身辺から、何人かの不審な者たちが姿を消している。

貴族3 ヘルマン殿と、イザベル様の実子コンラート殿は、ただちに斬首刑に処せられた。

コンラート殿は、早死にされたシュテファン殿と、その妃のイザベル様の一子だ。

貴族4 ヘルマン殿は、亡くなられたシュテファン殿の甥っ子に当たる。

貴族5 また併せて、貴族が二人、エーリッヒ殿とシュツツ殿が処刑された。連座をしたという疑いをかけられてな。

貴族1 これから先、まだまだいやなことがつづく予感がする。

顔に化粧をした道化が扉を開けて顔を出す。

貴族たち、急に話をやめる。

貴族2 道化、なぜこんなところへ顔を出す？

道化 （ふざけて）ギュンター殿下ご用達のお笑いをお城に届けに参つてござるが、殿下はお見えにならぬようで。もしもと思ひましてな。

貴族3 笑いといつしょに嘘八百もな。

道化 八百などと。

とてもそんなには仕入れてござらぬが、特別のやつには綺麗なべべを着せて。

貴族4 飾り立てるのか。

道化 そのとおりで。

でも、旦那衆ほどには及びもつきませぬ。

貴族5 口の減らぬやつだ。

道化 子沢山の旦那衆。

早く娘ごには、綺麗なべべを着せて、外へやつて口減らしをなさりませ。

貴族1 殿下は、こんなところへ顔を出されぬ。

離宮の方へ行くがよからう。

道化 それでは、離宮へと大急ぎで参ろう。

韋駄天走りには、ヘルメス様のサンダルを借りなきやならぬ。

それではごめんなすつて。

（聞こえぬように） よちよち歩きの旦那衆。

第四場

ギュンターの離宮の一室。

ギュンターが独り、険しい顔つきをして、不機嫌なようすで座つている。

ギュンターによつて、密かにイザベルがいる城塞へ送り込まれた刺客の中の一人が、一礼をして入つてくる。

刺客 殿下、ご報告に上がりました。

ことは無事に終わりました。

ギュンター 実行したのは誰だ。

刺客 ハイ、わたくしと、殿下がわたくしとは別に、お命じになつた者たち、合せて三人であります。

わたくしども三人とも、互いに顔を知らない者同士でありました。

ギュンター どのような具合であつたか？

刺客 ハイ、殿下のお指図どおりにおこなつて、すべてについて抜かりなく終えてござります。

ギュンター わかった。

その方は、もういちど現場に戻つて、周辺のようすに何かの変わりごとがないか、探りを入れるのだ。

手伝つた地元の者にはその方から、こっそりと目立たぬように、報酬を渡してくれ。ほかの二人には、それぞれ領国を離れて、どこかの傭兵隊に身をおくように申し付けてある。もちろん、しばらくの間だ。

よいか、すべてについて他言はならぬ。
だんまりをとおすのだ。

いつまでも、ことの次第や結末がわからぬようにな。

刺客 ハイ、承知いたしました。

刺客、入つてきた時と同じように、一礼をして引き下がり、部屋から出でいく。

ギュンター (刺客が出ていくのを見送つてから) お互に見も知らぬ別々の者たちに命じて、同じ一つの仕事をやらせてみる。

互いに競い合つて、われこそは一番のご褒美にあずかるうとして、それでも失敗だけはやらかすまいと、慎重にことを運ぶだろうよ。

徒党を組んで悪さをやらかす心配もあるまい。

一人目の報告が終わつたあとで、二人目三人目という具合に、別々に報告させて照らし合わせてみる。

そうすれば、誰がどのようにことを飾り立てるか、誇張するか、何がどれだけ嘘か、事実のほどがどうか、わかるうというもの。

それによつて、それぞれに報酬を与える。

椅子から立ち上がり、部屋を歩きながら。

口調を変えて腹立たしく。

それにしても、実の姉に当たる者が、おれの命を狙うとはな。

君主のおれを、亡き者にして、後におのれの言いなりになる、出来損ないの息子のコンラートを後釜に据えようとはな。

その上で、愚かしくも隣邦のヴィルトベルクと、同盟を結ぼうとしおつた。

やがては、この国を乗つ取られる羽目にならうことも知らずにな。

忌まわしい魔性の女め。

名君と称された父上のものとで、心根もまつとうに生きてきたおれの心に、おぞましい猜疑の種を植え付けやがった。

それが芽生えて醜く成長して、人を疑つてやまない陰険な思いと、毒々しい悪意の心が住み着いてしまった。

おれが自分でも腹立たしく思うのは、これらの中に、醜さばかりが目立つて、美的な要素がひとかけらもないことだ。

(間) 名君と呼ばれた者を父にもつ、実の姉の仕業だとすると、血を分けたこのおれの身にも、もともとその惡意に満ちた、陰険で激しやすい血が流れているとしてもおかしくはない。

今まで気もつかなかつたことが、現われて出た。

(間) だが待てよ。

おれの身にも、この邪惡な血が流れているとしたら、いつたい誰のせいだ？
亡くなつて久しい、母上か？

いや、母上はむしろ地味で、素直で大人しく父上によく仕える人だつた。
そうすると、父上か？

信仰心があつく、修道院を寄進するほどの敬虔さで領民に慕われたものだが、ひょつとしてあれば、自分を偽るための、隠れ蓑ではないのか？
自分でも気づかずに無意識のまま、世間をあざむくための手立てとしてな。
定めてそうであるにちがいない。

偽善者よ、おれの父親などと。

母上といつとき戯れて、おれをこの世に送り出した、ただの器にすぎぬ。
一步ちがえば、おれはただの、市井の一人のみなしごであつたかも知れぬ。
だがな、おれの父親である必要はなかつた。

それが「英明な君主」とは、聞いてあきれる。

なお歩きつづけるが、急に立ち止まって、しばらく間を置いたのち、自嘲気味に。

自白をした实行者のヘルマンには、反省をして、恭順を示させたうえで、処刑をしてやつた。

最高の皮肉というわけだ。

おれが人を殺すのは、人を恐れるためだ。

猜疑の心がそうさせるのだ。

おれは、人を疑うことを見えはしたが、憎しみを覚えたことはない。

憎しみのために、殺そうとは思はない。

おれのこの耐えがたい猜疑の思いは、熱く赤く燃え上がることなく、冷たくて青白い炎をあげて燃えあがる。

青白い炎を焚きながら、何とも言えぬ孤独のさびしさを、知ることになってしまった。

ギュンターの妃のカロリーネ。

別室で一人、ギュンターの部屋のようすを用心深くうかがいながら。

カロリーネ 隠謀が発覚して、荒山の砦のお城に、囚われておいでだつたイザベル様に、何ごとか起きたようだわ。

姉上のイザベル様は、自尊心と権勢欲が強く、弟の殿下に、いつも見下したような言動をしておいでだつた。

そして、身分の高い親族があることを笠に着て、たいそう私を蔑み憎んでおられたわ。でも、わたしの家系は先祖代々からの貴族階級、お爺様は先の先の君主のルドルフ様に重用されて、次いで、先のオットー様の側近だつた方、誇りこそすれ、恥じることなんかないわ。

わたしに何かの野心でもあると思つていてるの？

自分の意のままにならぬ殿下が、我慢ならなくて亡き者にしようとしたのね。

殿下は妻のわたしにも、意を配つてくださらないけれど、わたしの生涯は、さるお方にすべてをおまかせしているわ。

（十字を切りながら）すべては、そのお方の思し召しのままに。

第五場

ふたたび離宮の一室。

ギュンター、馬上試合の手入れをしている。

誰が訪ねてきたかを、知つているようすで機嫌よく。

ギュンター 戸を叩くのは誰だ。どこの阿呆だ？

道化 わたくしです、わたくしでございます。

ギュンター どこの阿呆かを訊いておる。

道化 （ふざけながら芝居じみた声で）阿呆とは、異なことを。

ギュンター ほかに、どんな言いようがある。

阿呆ならば入ってよい。

入れ。

道化、わざとおどおどとしたふうに入つてくる。

顔に化粧をして、左側が白色、右側が黒色の衣装を着ている。
体をひねって、わざわざ見せつけるような素振りをする。

ギュンター（冷やかして）着て いる物が、みぎひだり、ちぐはぐだな。

道化 これは、真理を象徴しているのです。いわば二律背反。

伝統的な、そして古典的ともいえる演出です。

左が知恵と知性を、右が愚と無知を。大昔のソクラテス的なテーマです。

左側を赤色に変えてみると戦争を、そして右側は死を意味します。

いや戦争も死を意味するとしたら……エエと、平和を表す色はですね、それは……エエと……。

ギュンター いつそ うこと、みぎひだりはやめて、前と後をそのようにしたらどうだ。

道化 なかなかの発想に富んだお言葉です。

創造的でさえある。

大いに結構ですが、少しばかり複雑で微妙なところが生じます。
いや、当て付けにとられかねません。

表で服従、裏で背反、面従腹背ということになりかねません。

ギュンター 無理なこじつけや、屁理屈はよせ。

道化は道化らしく、阿呆なダジャレや皮肉を言つておればよい。

胡麻をすつたり、お世辞を言うのは、貴族たち年寄りどもがすることだ。

多弁で言葉が明瞭なわりには、意味が不明でわからぬのは、役人どもの言うことだ。

（問をおいて）うむ、貴族たちめ。

おまえたちは、ろくろく働きもせず、ただただ先祖からの財産や録を食むだけで、何かにつけて寄り合つては、駄弁を弄したり愚痴つたり、拳句の果てにお互い同士、散々にケチをつけ合うのが落ちだ。

道化 ケチは難癖、難癖をつけ合っているのは、貴族議員たち。

馬上試合の騎士たちは、傷をつけ合い、商人どもは嘘をつき合い、町衆たちは、お互いに貸し借りの付けをつけています。

ギュンター 口の減らぬやつだ。

道化 減らぬのは、母ちゃんのポンポコお腹、いつも孕んでおります。

お陰で減るのは、亭主の財布の中ばかり。

ギュンター つまらぬダジヤレだ。ほかに何かないのか。

道化（引き取つて）ござりますとも、ござりますとも。

先だって、わたしがお城へくる途中、道端のスモモの木に登つて実を齧つておるときに、うつかり取り落としたスモモが、ちょうど下を通りかかったヤツの頭に当たりましてな。ヤツが上を向いて睨みつけるものですから、わたしも「気をつけろ、上を向いて歩け」と言つてやりますと、ヤツめが私のツラを下から見上げて「おまえの上さまは、よっぽどの変わり者だな、おまえのようなアホな猿を飼いおつて」とぬかすじやありませんか。

したたか者ですな。何しろ、わたしは木の上にいるのですからな。

ヤツめは、なかなかのしたたか者ですな？ 剛の者ですか？

ギュンター（にやにやしながら）もうよいわ。

思い出した用事がある。下がれ。

第六場

隣室に控える侍従を呼び出すために、ギュンター、呼び鈴を鳴らす。

現れた侍従のアルベリッヒは、瘦せぎすで背が低く、一目では、若いのか年寄りか、判断がつきかねるほどだがまだ若い。

狷介で小ずるそうな眼つきをしているが、胸の奥の隠れたところでは、どうしようもない劣等感を秘めているのは確かだ。

二人さっそく、密談をはじめる。

アルベリッヒ お呼びのようなので、早速あがりました。

ギュンター ああ、おれの近くに寄つて座れ。

アルベリッヒ（近くに椅子を引き寄せて座る）

ギュンター 家僕から、その方が、おれの身辺に仕える侍従になれたのも、ひとえにその方の才覚によるものだろう。

アルベリッヒ とんでもございません。

ひとえに殿下のお引き立てによるものでございます。

このように、殿下のお側でお仕えできることは身に余ること、まことにありがたいことでござります。

ギュンター ところでその方、カール・レオンハルトを覚えておろうな？

アルベリッヒ はい、覚えております。

先君のオットー様が、お亡くなりなつた際に、自ら宰相の身を引かれて、隠居なされました。

ギュンター そうだ。

(何か意味ありげに相手を見つめながら) おれはどういうわけか、その後の彼のこと
が気にかかるってな。

アルベリッヒ (まごついていたが、やがて気を取り直したふうで) はあ。お言葉を聞き
まして、初めてわたくしもそのように思えて参りました。

仰せのとおり、たいそう気にかかることでござります。

ギュンター おれが知るところでは、何やら腑抜けのようになつて、あるいはそうではな
くて、ほかに何かの考えがあつてのことかは知らぬが、ひょつとして妾宅のところへ
か、これもよくわからぬが、日が暮れかかると一人でふらふらと、毎日のように外へ
出かけるらしい。

アルベリッヒ いつかわたくしも、そのような噂を耳にしたこと�이ございます。

飲み屋の方に姿が見えないとなると、仰せのとおり、きっと妾宅のところでございま
しょう。

ギュンター ところがある日の暮れ方、遠からぬところの警護隊の厩舎からとつぜん、綱
から放れた暴れ馬が往来に飛び出したかと思うと、間もなく彼の悲鳴が聞こえる。
馬はそのまま走り去つて、それから辺りは静かになり、またもとどおりになつて物音
ひとつだにしない。

(顔を覗き込みながら、声をひそめて) どうだ? こここのところ、その方にはわかる
な?

アルベリッヒ (しばらく怖じ気づいて黙っていたものの、またもや気を取り直して) は
い、わかりますとも。

ようやくわかりましてございます。

厩舎から暴れ馬が往来に飛び出すことは、よくあることでござります。

ギュンター そうだな。それでは続きを、後日また話しひきてくれ。

下がつてよいぞ。

アルベリッヒ (深々と、氣おくれしたふうで、一礼をして引き下がる)

ギュンター、アルベリッヒが退室したあと、独り言。

ギュンター アルベリッヒよ、その方は伝説のニーベルングのように、狡猾で抜け目のな
いやつのようだが、やつがジークフリートにしたように、素直におれに仕えるのだぞ。
よいか、このおれに、一心を持つてはならぬぞ。

貴族の館の廊下。

城塞のイザベルに異変があつてから、何日か経過している。

貴族1 山の砦のヴィルデ城に、幽閉されたイザベル様の姿を近ごろ見かけぬという噂だ。
貴族2 地元の者の話では、城塞にはいつものほどの警護兵の姿が見当たらず、城塞は何となく静まり返っているという。

貴族3 いつかの夜に三つの黒い影が、城からからひそかに立ち去ったという。
貴族4 詳しいことはわからないのか？

貴族5 これ以上の詳しいことを、地元の者たちは黙り込んで、話したがらない。

貴族1 あの道化を抱き込んで、探りを入れてみたらどうだ？

貴族2 ダメだ。やつは、口先だけで生きている男だ。

心のうちなどわかるものか。

貴族3 それに、やつが何を知っているというのだ？

貴族4 無駄なかかわりはよせ。

貴族館の議員たち、声をひそめて。

貴族5 いずれにしても、イザベル様に、何かがあつた。

貴族1 これで、ひと区切りついたってわけか。

貴族2 いや、まだあるかも知れない。油断はならぬ。

第八場

数日の後。

馬に蹴られたらしく、腹部に大けがをした、レオンハルトの遺体が道端で発見される。

宮殿の君主の間、カロリーネが同席している。

カロリーネ 先君のお父様の時の宰相のカール・レオンハルト様が、街道で暴れ馬に蹴られてお亡くなりになつた。

宰相を退かれた後の隠居の身のお方が、このたび思いもよらぬことで、お亡くなりになるとは。

よほど、運命の女神の、不興を買つたものとしか言いようがないわ。

それとも、仕組まれた誰かの悪意によるものかしら。

ギュンター その場にいるか、いなかで、その者の運命が分かれることがある。

もちろん、その場に居合わせない方が、よいにきまつてている。

運命の女神たちも、手の出しようがないからな。

行動をするか、しないか、もちろん行動しないことがよいのは、わかり切っている。

道を歩いているだけで、思いもしない、不慮の事故に遭うことだつてあるのだ。

ゆえに、出かけない方がよいのだ。

（間をおいて、何やら意味ありげに）その場に居合させて、あらぬ疑いをかけられるよりも、そのようなところにいない方がよいにきまつてている。

カロリーネ、何かに怖氣立つような表情を見せながら、無言で部屋から立ち去る。

二人のあいだに冷えきった雰囲気がただよう。

ギュンター、部屋に一人のこりながら、何やら呟いているうちに次第に激昂する。

おれは、天から呪われた選民だ。

英明君主といわれた者のもとに生まれた、いわば鬼子だ。

この榮誉に臆することなく、堂々と猜疑の鬼たる悪党であれ。猜疑を持つことに、中庸中途半端などということはない。

ロジックに反する。

疑い出したらキリがない、というのが決まり文句だ。

小心者らしく、天邪鬼のようにひねくれておれ。

選民である鬼子という、何とも奇妙な取り合せなことだ。

こうして、悪鬼のような心を秘めて、そとづらは陽気な笑顔をもって、暴虐に立ち振る舞うのだ。

おれを暗殺しようとやつらには、反省が間違いないことを確かめたうえで、死刑を執行してやつた。

まことに効果的な手法であつた。

暴君といわれる者ほんどは、小心者か、怖がりかのどちらかだ。

おそらく、小心者のゆえに怖がるのだろう。

だがな、ほんとうの暴君は、そのような者ではないぞ。

大胆に無慈悲に、人の意見などはいつさい意に介さずに、自分の思うざまに振る舞うことだ。

残忍さを超えてこそ、得られる境地をめざすのだ。

そしてそれを、美学になるまでもつてゆくのだ。

それが非凡というのだ。

生まれ落ちて、すぐに洗礼を受けたとはいえ、おれはその前に、まぎれもなきゲルマン人だ。

古代のゲルマン民族の神々、主神ヴォーダンを祀つて何が悪い。

伝説の騎士、ジークフリートの勇姿を思い見よ。

そして何ごとにおいても、慎重であるよりも、果敢に攻めることが大切だ。
おれは、馬上試合で相手と闘うことでそのことを学んだ。

第九場

離宮の一室に道化がきている。

ギュンター、道化を相手になぜか機嫌がよい。

馬上試合用の鎧の手入れに余念がない

ギュンター 今日はまた何の演技だ？

（からかって）悲しみをじっと耐えている、詩人の真似でもしているつもりか？

道化 詩人と道化は紙一重、いや、裏表といつてもいいくらいです。

ともに、理想的な高い境地を目指しながら、実現できないでいるのです。

（苦しそうな仕草をして）そのためにはこのように、悶えながらじっと苦しみに耐えて、
悩める者の目付きをしているわけであります。

ギュンター 下手な芝居はよせ。

もう少し、ましな人間の演技ができないのか。

道化 人間がお粗末なら、比例して神さまのでき具合も悪くなります。

（天を仰いで）まことに神さまには、不敬失礼なことではございますが、何分にも
世間の者がそのように申しておりますのでござりまするので。

ギュンター おれは、そのでき具合の悪い神さまにも及ばぬゆえに、頼つてくる者がいた
としても救つてやれぬナ。

道化 ごもつともなことで。

いやその、何と申し上げるとよろしいのやら……。

ギュンター もうよい、その皮肉や、当てこすりめいたことを言うのをやめて、いつそ
のこと、その化粧を落として、まつとうな者の顔を見せてみてはどうだ？

いつぞやの、スモモの木に登っていたときの、猿のようなツラをな。

道化 ご勘弁ください。

そのようなことをすれば、本当のことが言えなくなります。

それに、化粧を落としたり、衣装を脱いだりしたら、わたしはただの凡人です。わたしは道化であればこそ、こうして殿下のお側でお仕えできるのです。

ギュンター もつとも、化粧を落として、もとの凡人に戻つたつもりが、もはやすっかり道化根性が身についてしまつて、どんなに嫌に思えても、日ごろの一人の時にも、自分に嘘をついたり、おどけてみたり、泣いてみたり、変な仕草で歩いてみたりといった具合に、一目見て気が狂つたように、ならないとも限らない。

道化 （わざと大仰なようすで）思つてみただけで、そら恐ろしいことでございます。そんなに人を脅かさないでください。

しかし、なかなか文学的でもある。

（気を変えたふうに）でも、それが自然であれば、それでもいいかもしません。何しろ悩まなくていいでしようから。

ギュンター （眞面目に）おれは一介の書生でもよかつたのだが、皮肉なことに一国の領邦の君主だ。

道化 （間をおいて）じつは殿下、そのご尊顔にお目にかけたき人物を、部屋の外に待たせておるのでござります。

なに、人物と申しましても、ほんのわたしの知り合いの、取るに足らぬ者でござりますして、信心深い年老いた、キリスト教徒めにござります。

ギュンター そうか、構わぬからここへ通せ。

道化に案内されて、キリスト教徒の老人、ギュンターに向かって、恭しく腰をかがめて一礼をして部屋に入る。

ギュンター、斜め横の椅子を指して老人を座らせる。

道化は、老人のそばに立つたままの姿勢。

ギュンター（老人を横目に見ながら）道化の話では、その方は信心深いキリスト教徒ということだが、なぜ、そのように熱心にキリスト教を信じるのか？

老人（正直に）はい、これまでにいろいろ悲しい目、辛い目に会いまして、そのうえこのように年老いてしまいましたので、キリストさまにおすがりするのでございます。死ぬまえには、告解をして罪を神さまにお赦しをいただきたく思います。

ギュンター、顔をまともに向ける。以後もその姿勢をつづける。

ギュンター 死ねばどうなるかな？

老人 はい、靈は黄泉にとどまりますが、世の終わりのときに、キリストさまが再臨なされまして、靈は審判を受けて、正しき者は神の国の永遠の命を、悪しき者には永遠の

刑罰が定められます。

ギュンター 天国はあるのか？

老人 はい、この空高く（天を仰ぎ見る仕草をして）すべてを、見そなわすエホバさまがおられ、キリストさまが右側に座つておられます。

ギュンター 地獄はあるな？

老人 はい、この地の下にあって、永遠の刑罰を受けるところでございます。

ギュンター われわれはそれぞれ、古来から、ヴォータンやユピテルをはじめ、ゲルマンやギリシャ・ローマに由来するいろいろの神々を持つが、その方たちの神は、なぜ一人なのか？

老人 はい、真実が一つであるように、エホバの神さまお一人なのでございます。

ギュンター それは、言葉として、わからぬではないが、（道化に目配せをして）何やら道化仕込みの詭弁のように聞こえるぞ。

道化 （ズツコケる）

ギュンター キリストと申す者も神なのか？

老人 はい、神さまでございます。

ギュンター それでは、神が二人いることになろうが。

老人 イエス・キリストさまは、エホバ神さまのおん子でございます。

そしてエホバ神そのものでもあらせられます。

ギュンター よくわからんな。

して、そのキリストは十字架にはりつけにされて死んだのだな。

いつたい、神は死ぬものなのか？

老人 はい、十字架にかけられて、お亡くなりになつたあと、三日目に甦られたのでございます。

そして、使徒たちの前にお姿をお見せになつたのちに、昇天なされたのでございます。

ギュンター わからんな。

キリストは、いなくてもよかつたのではないか？

老人 いえ、キリストさまのお取り成しがなければ、罪深い者たちは救われないのでござります。

ギュンター それにしても、なぜ十字架にかけられるものではございません。

老人 お取り成しが、成就するためでございます。

ひとは、自分の犯した罪をつぐない切れるものではございません。

それで、罪深い者たちの、身代わりに成られたのございます。

ギュンター いよいよもつて、よくわからんな、お取り成しなどと。

徳のある、やさしく憐れみ深い一人の男が、他人の身代わりにしろ、冤罪にしろ、はりつけになつて死んだ。

それをまわりの者たちが、惜しんで嘆き悲しむ。

よくある話だ。それでよいではないか。

三日目に甦つたというが、使徒たちは、キリストという者の靈を見たにすぎぬのではないか？

老人 蘭られたキリストさまは、エマオの村へゆく道で、二人の弟子にお会いになられ、そののちにもエルサレムで、弟子たち全員の前に立つてお話しになりました。

また、ローマ市民であつたパウロさまは、ダマスカスヘキリスト教徒を召し捕りに向かう途中、キリストさまのお声を聞いて、回心をなされました。

ギュンター ギリシャの地方の言い伝えでは、靈は供えられた生贊の血を啜つたのち、話しあじめるという。

その方は、審判を受けたのちに天国へゆけると思うか？

老人 それを願つておりますが、どのようになるかわかりませぬ。

エホバさまの思し召し次第でございます。

ギュンター その方はいま、どこに住んで、どのような暮らしをしておるのか？

老人 はい、修道院長さまのお情けで、修道院の菜園の片隅の小屋に住まわせていただき、ときおり菜園の世話を手伝いながら暮らしております。

ギュンター その修道院から、ちかぢか修道僧たちを追い出して、いま一つ新しい離宮に造り替えるつもりだ。

して、どうだな？ もしその方が、いにしえからのゲルマンの神、ヴォーダンに仕え
るなら、菜園の片隅などではなく、どこかに住みよい館を与えてやるがどうだ？

老人 私は、この老いの身をエホバさまに捧げております。

すべては、エホバさまの思し召しのままでございます。

ギュンター （しばらくしてから） そうか、もうこの辺で下がるがよい。

老人、入ってきたときと同じように、ギュンターに向かつて恭しく一礼をして部屋から立ち去る。

道化 （ギュンターに近寄つて） あの者をいかがなさるおつもりですか？

ギュンター 誰も告発者がおらぬ案件で、処罰するわけにもゆくまい。

そちとても、そのつもりで連れてきたのであろうが？

道化 仰せのとおりです。

ギュンター 宮殿の外まで送つてやるがよい。

道化、老人に追いつき、宮殿の外へ出る。

老人　（離宮の外へ出たところで、深々と礼をして、道化に對して十字を切る）

道化　おい爺さん、ご老人。

おまえたちにとつて、異教徒であるかも知れぬこのおれのために、なぜ祈つたりするのだ？

老人　行く末、大きな苦悩を背負われる、おまえさまのために、失礼ながらお祈りをしましたのです。

道化　この先、このおれに大きな苦悩とな？

老人　はい。

殿下のためにも、して差し上げたかったのですが、そのようなことをすれば、かえつてご機嫌を損なうことになりましよう。

（最後に十字を切つて）カロリーネ様に、神のご加護を。

——幕——

第二幕

第一場

宮殿の貴族の控えの間、貴族たち。

貴族1　近ごろ急に殿下は、宮殿に滞在しならぬようになつた。

貴族2　われわれ貴族の議会にも顔をお見せにならぬ。

貴族3　領邦議会は、英明な先君のオットー公が生前に提唱なされて成つたものだ。

審議する案件によつては議会の承認が必要だ。

審議の結果を上奏しようにも、殿下がおられぬのでは話にならない。

貴族4　行政を任せられた官僚たちも困惑しているという。

貴族5　下手をすると、官僚たちが、勝手気ままな振る舞いをしないとは限るまい。

貴族1　国のまつりごとを差し置いて、狩猟と馬上試合に夢中とはな。

連邦官房長の、リヒヤルト・オイケンが顔を出す。

オイケン そんなにみんなでたむろして、今日はまた何の井戸端会議だ？

貴族2 井戸端会議などと、何を言う。

大事なまつりごとの相談だ。

貴族3 何しろギュンター殿下が、なかなか顔をお見せにならぬのでな。

オイケン だからといって無意味にたむろして、油を売つていても仕方がなかろう。

みんなで協議した事案は官僚を通じて殿下に上奏するのだ。

そして否応なしに承認をうることだな。

貴族4 そういう貴殿も、領邦議会の一員であること忘れないでもらいたいものだ。

貴族5 それに、貴殿の責務である宰相や殿下への助言はどうなつている？

隣邦との関係は、どのような具合だ？

オイケン 四方を隣邦に囲まれている以上、絶えざる警戒が必要だ。

警護隊と貴族や家士たちで国を守るが、それよりも、むしろ隣邦との交流と交易を目的とした、経済的な戦略ともいうべきものを、提案してもらいたいものだ。

オイケンが立ち去ったあと。

貴族1 まるで財務官のように、経済のことを口にしたな。

貴族2 官房長ならいまこそ、その職責からして、殿下に物申すべきところを、いつこうにそのような様子がうかがえないのは、どういうわけだ？

貴族3 そのくせ、まるで君主に成り替わったような話しぶりだ。

貴族4 思い上がっているようだ。

貴族5 それについても、殿下が議会に顔を出されぬために、議会の開きようがない。困つたことだ。

貴族1 議場であれば、オイケン卿にそうやすやすと話させぬものを。

第二場

離宮の君主の一室。

イタリアから帰国したばかりの、警護隊の士官のクラウスとフランツが、敬礼して入る。

椅子の近くに、馬上試合につける武具が一式置いてある。

ギュンター 二人ともよくきてくれた。

(クラウスに向かって) きみとは旧知の仲だ。

クラウス (恭しくうなずく)

ギュンター (フランツに向かって) きみとは初対面だが (クラウスの方へ顔を向けて)

彼の友人ということで、きてもらつた。

遊学のイタリアから、帰つてきたばかりだというが?

クラウス はい、先君のオットー公に遊学を願い出て、先方に連絡を取つていただき、おかげさまでボローニヤ大学で、二年間の聽講をゆるされました。

ギュンター イタリア戦争が始まろうとするさなかに、遊学とはな。

しかし、いづれは官職に身を置くことになる有能なきみたちだ。

いろいろな知識を身に付けるのもよかろう。

しかし、ストア学派の学問を学んできたと聞いているが、また随分と昔のものを学んできたものだな。

クラウス はい、古拙な学説ほど、真理がより明確に提示されていると思ったからです。ギュンター (冷やかすように) そんなものかな。

クラウス (引き取つて) 先君のオットー公は、学問が好きなお方であらせられました。ギュンター (制する素振りで) 早速だがそのストア学派が口にする、ロゴスとかいうものは、そもそも何だ?

クラウス ロゴスは神であつて、世界全体に秩序をもたらすものとして、宇宙の中にも人の中にも、いたるところに遍在しております。

ギュンター おれの中にもか?

クラウス もちろんです。

世界の中の一部である人間は、誰でも本来的にロゴスを持って生まれております。

このロゴスがもたらす秩序を認識し、正しく理解することで、自己の存在が確かなものとなります。

ギュンター そんなものを認識しなくとも、おれは確かに存在しているがなア。

クラウス この原理を会得して、はじめて自己の完成が成るのです。

ギュンター (からかいながら) 自己の完成が成つて、自我が潰れるのだな?

クラウス 自己と自我は同一のものです。

ギュンター よいではないか、完成がすなわち破壊。

なかなか示唆に富んだ言葉だ。

秩序を保つには、情欲があつてはならぬな?

クラウス 情欲は、他の恐怖や苦悩とともに、パトスすなわち理性の病的状態を意味します。そのような状態に陥らないことが大切です。

ギュンター (フランツに向かって) 彼は情欲を否定するわけだな。

もちろん反対だな、エピキュロス派とかいう快樂主義者のきみはな。

フランス わたくしどもが信条とするのは、世間で言われているような、情欲や放埒に身を任せるようなことではありません。

むしろそれから遠ざかることを意味します。

ギュンター そうかね。そんなにきばらずに、本能のなすがままに、むしろ情欲や放埒に身をゆだねることが快樂というものだ。

フランス 人が飢えるとする、喉が渴くとする、それで一切れのパンを食べ、コップ一杯の水を飲んで心身ともに癒される。

飢えや渴きが除かれると、心身は安定して静かな状態を示します。

人がこれ以上を求めなければ、いたずらに心を煩わされることもなくなる。

そのような心の境地を楽しむのです。

むしろストア学派と同じく、禁欲主義ともいえるものです。

ギュンター クラウスの言うロゴスなどはないのか？

フランス ありません。神は完全で不变な、一種の摂理のようなものとして存在しますが、直接われわれ人間に関わることはないのです。

ギュンター うむ、神の無関心か。

それでは、どのような悪さをしても、ふざけて遊んでも、神のお叱りがないわけだ。お陰で、ちょっとしたアイデアが生まれそうだ。

それにしても、禁欲派と享楽派とは、この上ない取り合わせというものだ。

これからも折々にきて、面白い話を聞かせてもらいたいものだ。

ギュンターと別れて、部屋から退室したあとの道すがら。

フランス 殿下は、馬上試合に夢中だと聞くが、強いのだろうか？

クラウス 長槍のわざは普通だが、剣を持たせると強いというか、やりにくいくらいに聞いている。

変則やルール違反を誰も咎める者はいないからな。

フランス 誰も殿下と、練習試合をやりたがる者はいないだろうな。

クラウス いるわけがない。

フランス 馬上試合はともかく、国政を顧みないのは問題だ。

クラウス 議会にも、ほとんど顔を出さないらしい。

第三場

しばらく経った後の日、貴族館の一室。

それぞれ一様に、声高に話し合っている。

貴族1 領邦の東方のフクスハイムが、隣邦のヴィルトベルクから侵攻を受けたとの知らせだ。

貴族2 急きよ、城門から離れて館を構える騎士、ヨアヒム・ヴィーラント殿が宮廷に呼び寄せられた。

さつそく議会を招集して、議員たちの意見を聞くべきだ。

貴族3 どのような対策をとればよい？

貴族4 急ぎ傭兵を募集して、大軍を編成して派遣するのだ。

貴族5 それには時間がかかりすぎる。

貴族1 はどうする？

貴族2 いま、宮廷で臨時会合を開いて、協議中だ。

貴族3 おつけ結果は、われわれのところへ知らされるだろう。

貴族4 われわれとしては、待つ他はなかろう。

第四場

宮殿の宰相の間。

宰相のディートリッヒをはじめ、一同が集まっている。

相変わらず、ギュンターの顔は見えない。

ディートリッヒ 貴殿たちには、緊急に集まっていた。

（ヴィーラントに向かって）騎士ヴィーラント殿には、すでに聞き及びでもござりま
しょうが、急ぎ遠方から駆けつけていただいた。

（頭を下げながら）お礼を申し上げる。

ヴィーラント （武人らしい返礼をして、無言で応える）

ディートリッヒ 近々の情報では、敵勢はわが領邦の東南の、フクスハイムの森林地方面
から侵入してきている。

推定される規模はおよそ500程度、うまく運べば十分に撃退可能だ。

ご承知のとおり、わが国は常備軍を持たない。

傭兵を集めには時間がかかりすぎる。

シュヴァルツ それで、どうするつもりです？

ヴィーラント とりあえず、わたしの配下の者たちと警護隊で騎馬隊を編成する。
加えて銃をもつ歩兵が必要だ。

シェヴァルツ 貴族と、その家士たちに招集をかける。

ヴァルター わたしの隊に加えて、住民と農民からも参集が必要だ。

それに併せて、わが領邦に向かつて、大きな岬のように突き出た形の相手の領土を取り囲むように、別働隊を布陣してはいかがですか。

相手を牽制するつもりでな。

ディートリッヒ 相手の領邦の国力はおおかたわかっているが、隣邦は一国だけではない。

四方が隣邦で取り囲まれている。

今後は、外交手段についての方策が必要だ。

ヴィーラント 戦術は、今や長槍を持つ騎馬戦から、銃を持つ歩兵が主力になつてきている。このままでは、わたしのもつ財力でもう間に合わない。

ディートリッヒ 何とかして国の財力の強化を図らねばならぬが、財務官にはよりいつそう努力してもらわねばならぬな。

なお会議がつづく最中に、オイケンの部下のホルストが、農民が騒動を起したとの知らせもたらす。

ホルスト ヴィーゼ村の農民たちが騒いでおります。

ヴィーゼ村以外に、フューゲル村とフルス村が同調して、段々と騒ぎが大きくなりつつあります。

オイケン 騒動の理由はいつたい何なんだ？

ホルスト いまのところ、はつきりしませんが、農民の中にはしきりにギュンター殿下のお名前を叫ぶ者いるようです。

このまま放つておくと、そのうち領内全体に、騒動が広がりそうな勢いを見せております。

ディートリッヒ まずいな、このままでは大がかりな一揆になりかねないぞ。

一揆というものは、領邦の国内問題とはいえ、外国との戦争よりもたちが悪い。

シェヴァルツ このところの天候不順、豪雨の後の干ばつで、小麦などの作物の不作が原因かも知れない。

オイケン それにしても、隣邦からの侵攻と騒動が、同時に起ることはな。

ひょっとすると、隣邦が介入しているかも知れぬ。

間諜がこつそりと忍び込んで、背後から農民たちを煽動しているやも知れない。

ヴァルター 大いにありそうなことだ。

ディートリッヒ いずれにしても、こちらに対しても急ぎ対処せねばならぬな。

オイケン なるべくな、武力行使はすべきではない。

会議のこの場は、わたしの代わりはホルストに任せるとして、わたしがそれぞれの村

の代官と、修道院長と司祭たちと一緒に、村の長たちを説き伏せましょう。

警護は代官の手の者で足りるだろう。

わたしは、急ぎこれから、離宮のギュンター殿下に知らせに参ります。

オイケンの他は、この後も協議はなおつづける。

第五場

離宮の部屋。オイケンがあわただしく入ってくる。

ギュンター、何かの気配を察したように、目配せをして、部屋にいたアルベルツヒを下がらせる。

アルベルツヒ、隣室のドアのそばで聞き耳を立てる。

オイケン 急ぎ、お知らせに上がりました。

隣邦のヴィルトベルクからの侵攻と、農民の騒動が同時に起きました。

ことは重大です。対策を急がねばなりません。

侵攻に対しては、宰相ディートリッヒ閣下のもとに協議を行い、騎士ヴィーラント殿の手勢と、警備隊と貴族たちとその家士、住民たちおも含めた軍勢で、対処することになりました。

いっぽう、農民騒動は一揆に発展すれば、わが領内の治安に直接かかわりのあることになります。

農民たちの中には非難をして、しきりに殿下のお名前を叫ぶ者もいるようです。

ギュンター（少し狼狽えて）どうすればよいと思うか？

オイケン ほかの村々に波及しないうちに、迅速にことを収めねばなりません。

この種の事態はいつたんほかに波及すれば、次から次へと広がって、手に負えなくなります。殿下の立場はたちまち危うくなります。

ギュンター（明らかに動搖して）だからどうすればよい？

オイケン 先君が、しばしば村々に出向かれたように、殿下が直接現地にゆかれて、親しく顔をお見せになるのが一番かと思います。

しかし、今はいきなりというわけにも参りますまい。

ギュンター もちろんだ。

そちが言うように、ほかへ広がらぬうちに手を打たねばならぬ。

何かよい手立てはないか？

オイケン このたびの、宫廷での協議は、わたくしの代わりに部下のホルストに任せて、

わたくしが村の代官と、修道院長と司祭たちと一緒に、村の長たちを説き伏せに参ります。

ギュンター それでうまく収まるかな。

オイケン 決して武力行使はせずに、騒動にいたつたいきさつを見極めて、適切な対処を取ることが肝要です。

議会で、議論などをしている時間がありません。

迅速にことを運ばねばなりません。

ギュンター 迅速に首謀者を見つけ出して処罰するのだ。

加えて、ほかに誰でもよい、農民の何人かを処刑するのだ。

見せしめのためにな。

ことが収まつてからでもよい。いや、その方がむしろ効果的だ。

オイケン わたくしは反対です。

そのようなことをすると、逆効果をもたらします。

反省する時間を与えて、恭順させることです。

これからは、以前に先君がなされたように、普段から殿下みずからが農村に出向いて、親しくご自分の顔を、農民たちあわせることです。

馬上試合の鎧と兜を脱いで、騎乗からでも、農民たちに挨拶したり、言葉をかけたりするのです。

ギュンター（不機嫌に）先君、先君と、まるで親父の亡靈に出会うようだな。

オイケン 時間がありません。

急ぎこれより出立いたします。

ギュンター このたびのことは、そちに任せる。

オイケンが出ていったあと、部屋の中を歩き回りながら。

うむ、ヴィルトベルクからの侵攻と同時に、農民騒動が起ることはな。気がかりなことだが、おまけにオイケンの報告を聞いて狼狽えてたりして、まづいところを見られてしまった。

折を見て、何かの手立てを講じねばならぬな。

第六場

宮殿のカロリーネの部屋。

カロリーネ、独り言を言いながら、歩きまわる。

カロリーネ 姉上のことがあつてから、殿下は変わつてしまわれた。

心がすっかり傷ついてしまったようだわ。

人を疑うことが身について、それに横暴な言動が加わった。

人と会うことを嫌がつて、近ごろは議会にもめつたに出席なさらぬようす。

先だつても、貴族議員のお父様の、使いの召使いのエミーリエがこつそりときて、議会での殿下の評判のよくないこと、貴族議員たちが、殿下からあらぬ疑いをかけられないよう、びくびくとしていること、そして念のためによほどのことがない限り、私の方からも連絡などしないようにと、お父様からの伝言だと言つて、帰つていつたわ。何とかならないものかと思うけれど、ときどきわたしさえも、避けようとする素振りを見せられては、取り付く島もない。

このままでは、わたしたち二人の間も、またこの国のまつりごとについても、よからぬことが起こりそうで、不安に思われてならないわ。

どうかお父様の身に、何ごとも起こらないように。

第七場

数日後、ヴィーラントの働きと、オイケンたちの対応が成功して、隣邦との戦いと農民騒動の双方とも、無事に収まつたとの知らせが議員たちにとどく。

貴族1 隣邦ヴィルトベルクとの戦いが、無事に収まつたとの知らせだ。

貴族2 農民騒動が一揆までにいたらずに済んだ。

貴族3 農民騒動では、オイケン卿の意向ばかりがまかり通つて、議員のわれわれの意見は反映されなかつた。

貴族4 オイケン卿の独断ともいえる対応であつた。

貴族5 殿下にも困つたものだ。満足に議会が開かれぬままに済んでしまつた。

第八場

離宮の一室。

ギュンターとオイケンが対坐して何か話し込んでいる。

ギュンター、鎖帷子の胴着を着けて、その上に長衣をまとつてゐる。

オイケン この度の隣邦との紛争と、農民たちの騒動も、幸いにうまく収まりました。

とりわけ、戦いには騎士ヨアヒム・ヴィーラント殿の働きは、まことに見事にあつたという他はない。

そこで、考えがあります。

このたびの、農民の騒動は、例年ない長雨と、その後の干ばつによる小麦と、他の農作物の不作が原因しています。

それで、農民たちだけでは、手に余り過ぎる溜池の造成と、橋の架設に加えて、河川の改修工事に取り掛かるのです。

計画の段階から、代官や村の長たちを参加させて、彼らの意見を交えながら、領邦と、農村が一体となつて取り組むのです。

貴族たちの宴会やら、馬上試合や鷹狩りに必要な経費を切り詰めて、方々から経費を捻出するのです。

ギュンター 全体に悪くはないが、われわれの一存ではゆくまい。

オイケン どうしてゆかないのです。

ギュンター 議会の賛同が必要だ。

オイケン それがどうしたというのです？

殿下が、議会を招集されて、殿下みずからの発議というかたちで提出すれば、全会一致で承認されること、間違いないです。

殿下は、オットー先君につづかれるお方。

君主という栄誉を大きくて掲げて、領邦の市民たち、農民たちに對して示して見せるのです。こういう時こそ、貴族たちに決意を示すのです。

貴族の議員たちには、私から陛下の意志を伝えておきます。

オイケンが立ち去ったあと。

陰鬱な口調で。

ギュンター 彼は、おれが親父からもらった、呪われた選民であることを知らない。

それゆえの、おれが持つ懊惱と悲哀を知らないのだ。

教訓や意見というものは、それを垂れている者の中においてのみ、充足しているものだ。他人が聞いて何の役に立つ？

溜池や河川の改修などと。

そんなことよりも、むしろ貴族をはじめ、町人や農民たちが、恐れおののくようなことを、やつてみせてやろう。

大して意味もない理由をいろいろと、ありもしない嫌疑を言い立てて、これと思う者に、処罰を与える。

効果的に何人かは、血祭りに上げるのもよい。

それで何人かの者は、すり寄ってきて難を逃れようしたり、それぞれが勝手に忖度をしたりで、ことを進めようとするだろう。

手始めに貴族の中から、一人目の者には、二人目の者に対しての監視を命じてやろう。二人目の者には、三人目の者の監視を、そして三人目の者には、……という具合にな。やがて、互いに監視をし合って、それぞれが疑心暗鬼の不安におちいる。

そうしているうちに、ありもしない告げ口までつち上げて、おれのところへ持つてくるにちがいない。

それを、うまく利用するのだ。

(意地悪く) それらのことを、あちこちのグループに仕掛けて、彼らのあいだに混沌と恐慌をもたらしてやろう。

さぞかし、恐怖におののきながら、おれを頼ってくるだろう。

さながら、絶えず狼の影におびえる草場の羊の群れが、羊飼いを頼るようにな。

羊たちは、隣で草を食っているもの同士を知っているが、群れの全体がどの方向に進むべきかは知らない。

それを朝な夕なに、草場の方へ、また囲いの中へと導くのが羊飼いの仕事だ。

よく見かける光景ではないか。

羊と同じく、下を向いているばかりの連中に見えているのは、目の先ばかりで、前方の山の姿は見えてはいない。

彼らには、全体を知る必要はない。

そのうえで、彼らには、それぞれ異なる部分、部分の任務を与えるのだ。

全体の究極の目的を知る必要はないのだ。

官僚であろうと、貴族の議員であつてもな。

これからは、いつさい議会に顔を出すつもりはない。

その必要はないのだ。

議員たちは、舞台のうしろの方に集まつて、いつもの同じ口調で、喋つたり叫んだりしているがよからう。

そのままそつくり、話に聞く、古代のギリシャ悲劇のコロスのようにな。

第三幕

第一場

離宮の一室。ギュンターと道化の二人。

ギュンター、またも馬上試合用の鎧の下に着る、鎖帷子の胴着を身に着けている。

ギュンター そちとの付き合いも大分になるな。

道化 はい、オットー様に、お仕えしておりましたころからです。

ときには、貴族の方のお屋敷でお内儀さまや娘ごに、町人集の寄り合いに、それから招かれて休日の警護隊の、どんちゃん騒ぎのお付き合いなど。

ギュンター あちこちで、よくも嘘八百がつけたものだ。

道化 何しろ、それが商売として。

真実とともに向き合つてみても、面白くとも何ともありません。

ギュンター もつともだ。いま、その真実を申したではないか。

道化 これは、参りましたな。

それより、いちど嘘や冗談と向き合つてごらんなさい。

それがいかなる意味を持つか、おわかりになるでしょう。
つまり、それらの裏側を見るのです。

すると真実が見えてくる。

いちどでも、真実を話してごらんなさい。自分で嘘をついていることが、わかるでしょう。

いちど、冗談を言つてみる。

それが、いかに虚しいかがわかります。

ギュンター お世辞を言うのも虚しいな?

道化 もちろんですとも。また一本取られましたな。

いちど詩を作つてごらんなさい。

絵を描いてごらんなさい。

自分が、どれほど下手なことかわかるでしよう。

ギュンター 無駄話はこの辺でよですがよい。

それより、何かほかにドキッとするようなネタはないのか。

道化 (さつそく引き取つて) わたくしが思つておりましたのは、他ならぬそのことでご

ざいます。実を申しますと、わたしは殿下にも、我が家の山の神にも内緒で、こつそりとヘソクリを貯めているのでございます。

殿下から、ときおり頂戴しますちよこつとしたお鳥目やら、他からのほんの、ちよこつとした実入りから、ほんのちよびつだけ、つまみ食いをするようにして、それをわたしの箪笥の奥の、さるところへ仕舞つておるのでございます。

ところがある日、家に帰つてみると、普段から無精な山の神に何ごとが起つたのか、珍しく掃除をしたとみえて、部屋の中がキレイにかたづいておるのでございます。

そのうえに、いつもは口うるさい山の神めが、黙つてわたしを見る目つきが、何とも奇妙でして、そのとき、わたしは心の底から思わず、ドキッとしたのでございます、ハイ。

ギュンター （苦笑いをして）下手な作り話はやめろ。

その方に女房があるなどと、聞いたことがないわ。

しかしそうやつて、当意即妙に作り話やら、冗談を言つているうちは大丈夫だ。

ところが、おれの前でびくつくようになると、気をつけることだな。

道化 （わざと心配そうに）そんなふうになりましょうか？

ギュンター ならんとも限らんな。

（話題を変えるように）それよりも、本当に思つているとおり、正直に言つてみろ。おれが、いにしえのゲルマン族の英雄ジークフリートを真似て、馬上試合に熱中するのを、狂氣じみていると思うであろうな？

道化 （うつかりと）はあ、そのように……。

（慌ててさも困つたように）いや、そのもう……。

勇者ジークフリートは、ニーベルングンの宝を守る竜を退治したり、ブルグント王国様を手助けして、嫁とりの旅に一緒に出かけたり、自らも美しい姫さまのために、ミンネゼンガーサながらの、さまざまな苦労や困難な冒険をしました。

ギュンター そうだったな。

おれの冒険は、さまざま強面の騎士たちを相手にした、馬上試合に勝ち抜くことだ。

道化 そして冒険の合間の気休めに、わたくしのような、阿呆を相手にしなさる。

ギュンター そうだな。

表が裏側などと、本当だとか嘘だとか、などとな。

道化 はい、白を黒と、黒を白などと。

部屋を辞してから独り言。

道化 いちど、まともに馬上試合をしてござんなさい。

本当は、相手がどんなに強いかわかるでしょ。

第一場

離宮の一室。

ギュンターと老貴族のクルト・ヴァイスバッハが対座している。

ギュンターを前にして、クルトが何かに怯えるように、おどおどとしている。

ギュンター（クルトを見据えて）その方が呼び出されたことで、身に覚えがあろうな？

クルト いえ、恐れながらわたくしには何も。

ギュンター 嘘を申すな。

おれの馬上試合にケチをつけおつたな？

クルト いえ、わたくしは、決してそのようなことは。

（啞然として）この年寄りが、なぜそのようなことを。

ギュンター 嘘を申すな。証拠があがっている。

ある者からその方と、もう一人の者が、おれの馬上試合を非難したとの報告が上がっている。

クルト このわたくしが、なぜそのようなことを。

それは誰かの讒言でございます。

いつたい誰がそのようなことを。

このわたくしに限ってそのようなことを。

ギュンター 黙れ。その方には、もう一人の貴族についての言動を報告するよう、申しつけておいたはずだ。

だが、いまだに何の報告もない。

してみると、その方ともう一人とは、グルだな？

クルト 滅相もございません。

ギュンター そのうえその方は、隣の国のある者たちと通じておるな？

その者たちに、わが国のこと、あれこれを知らせておろう。

クルト（必死になつて）とんでもございません。

なぜわたくしが、そのようなことを。

かの者について、何もご報告申し上げるようなことは、なかつたからでございます。

ギュンター 嘘を申すな。

報告することがなければならないで、報告のしようがあろうが。

クルト まことにごもつともではございますが、それはあまりにも恐れ多いことと存じましたので……。

ギュンター かの者に、その方の言動をちくいち報告するよう、申しつけておいたが、やはり同じように何の報告もない。

おかしいな？

怪しいと思うであろうな？

クルト （困惑と恐ろしさの表情で、無言のまま）
ギュンター 決まった。不敬罪だ。

警護兵！ この者を逮捕して連れ出せ。

第三場

何日か後の、貴族の館の中。

数人の貴族たちが、騒いでいる。

貴族1 クルト殿が処刑された。

貴族2 一本釣りにされた。

貴族3 クルト殿の広壯な屋敷は没収されて、たちまちギュンター殿下のものになる。

貴族4 以前にも殿下の謀殺計画が発覚したとき、確たる証拠も示されぬまま、二人の貴族が処刑された。

貴族5 隠謀を知りながら、報告をしなかつたという曖昧な理由でな。

貴族1 それにしても、先だっての農民たちの騒動の件以来、オイケン卿の羽振りのよさはどうだ。

貴族2 われわれを軽く見て、議会をないがしろにしている。

貴族3 貴族議会は、いみじくも英明な先君のオットー公が提唱されて、近隣の諸邦に先がけて作られた議会制度だ

貴族4 われわれに相談をしないで、殿下に具申するとは。

貴族5 殿下も殿下だ。

貴族1 ああ、われわれは何という君主を持つことだ。

第四場

離宮の一室。

ギュンター、馬上試合用の武具の手入れをしている。

アルベリッヒ、急ぎのふうで入ってくる。

アルベリッヒ 殿下、由々しき情報を得て参りました。

つい先ほど、入ってきたばかりで、まだ確かではありませんが、遅くならないうちに
お知らせに上がりました。

ギュンター 何ごとだ？

アルベリッヒ オイケン殿が、先のレオンハルト殿の件で探りを入れているようです。

オイケン殿の手の者と思われる者が、あちらこちらで根掘り葉掘りして、レオンハルト殿のことを聞き出しているそうです。

ギュンター どこから、その情報をえたか？

アルベリッヒ 何しろ、あちらこちらにわたくしなりに、密偵を持つておりますもので。

(わざと慌てたふうに) いえ、密偵などと、どうしてわたくしのような者に、そのよう
うな大それたことが。

密偵というのは、比喩的な言い回しでございます。

つまり、あちらこちらに、友達を。

たとえば、警護隊に馬をおろす博労の百姓とか、お城に出入りの八百屋だとか、煙突
掃除の若い衆とか、飲み屋のかみさんとかですね。

ギュンター 行きつけの女郎屋の馴染みもあるな？

アルベリッヒ はいはい、ただいま仰せの者たちや、飲み屋のかみさんたちは、警護隊の
連中がもつともご贔屓なものでございますから。

ギュンター オイケンは、政務に熱心で、生真面目な人物だ。

いまにして、そのような事にかかるとは、にわかには信じられぬ話だ。

その方の申すことは本当か？

おれの網には、そのような話はかかるぬな。

アルベリッヒ 殿下の前で、いい加減なことを申し上げては、ご機嫌を損なうだけです。

それくらいのことは、わたくしもわかつておるつもりでございます。

そこへオイケンが謁見を申し入れてくる。

アルベリッヒ、急ぎ隣室へ引き下がって聞き耳を立てる。

ギュンター とつぜんの来訪だな。

それでこのたびは、何用あつて参ったのだ？

オイケン 先だっての隣邦との紛争は、前にも申し上げましたが、騎士ヴィーラント殿の
卓抜な采配によつて無事に收まりました。

それについて殿下は、今後のわが国の防衛と経済と農村の治安を、どのようになさる
おつもりか、お伺いしたいのです。

ギュンター まことにわが騎士、ヨアヒム・ヴィーラントにはご苦労であった。

彼ほどの武将は、他には一人たりともおるまい。

その方にも、今後とも変わらぬ活躍を願いたいものだ。

オイケン 敢えて申し上げますが、領邦の君主たる者は、絶えず領内の農地や山野を見てまわつて、保全に努めねばなりません。

農地で働く農民たちや、城門内で店を構える商人たちや、辺りを行き来する町人たちのようすをよく觀察して、わが国の現状の把握に努めなければなりません。

同じように、殿下には議会になるべく顔を見せて、議員たちを束ねて、議会の運営をはかるべきです。

議会にはかる必要のない事項は、殿下みずからが裁断を下されるのは大いに結構。近隣諸邦とは、今後はなるべく紛争が起こらないように、外交手段を用いて友好条約の締結など検討すべき課題があります。

ギュンター 同盟を締結することは、たしか昔に金印勅書で禁じられていたはずだ。

オイケン 何も軍事同盟を、結ぼうというのではありません。

金印勅書に盛り込まれた趣旨は、当時の有力諸侯たちが互いに同盟を結ぶことで、あまりに力を持ち過ぎないよう、神聖ローマ皇帝がおもんぱかったことです。

いまから百年近くも前の話で、もはや時代遅れとでもいうべきものです。

軍備については、このたびの戦で、騎士ヴィーラント殿が申されるには、もはや乗馬の騎士同士が戦うのではなく、武器は長槍に変わつて銃を持つた歩兵たちの戦いへ、攻城戦には大砲が必要になるとのこと。

近隣の領邦の状況に合わせて、対処が必要であります。

ギュンター （オイケンの素振りを見て、イライラしながら）まだあるのか。

オイケン 現在の領邦議会は、先のオットー公が提唱されてなつたもの、言うまでもなく時代は変わりつつあります。

先だっての農民たちの騒動などを思い合わせると、議会は現在の貴族と宗教界に加えて今後は、市民、また場合によつては農民の代表をも加えた、幅広いものにすることをお勧めします。

これまで申し上げたこと、熟考のうえ、よきにはかられますよう。
後日、また伺いに上がります。

オイケン、貴族らしくきちんと一礼をして出でいく。

ギュンター （そのあと、腹立たしく）うむ、オイケンめ。

おれを軽く見ておるような、横柄なもの言いようをしおつた。
おれを見下しているような、目つきをしおつた。

第五場

オイケン退室のあと、つづいて隣室からアルベリッヒが顔を出す。

アルベリッヒ よくも、あれだけ厚かましく喋れたものだ。

殿下、オイケン殿は、議員の貴族たちにも、あのような口の利き方をして、反感を買っていると聞き及びます。

増長が過ぎるというのが、議員たちのあいだの意見のようです。

ギュンター その方は、議員たちの中にも、友達とやらをもつておるのか。

アルベルツヒ （薄笑いして）ご想像におまかせいたします。

ギュンター しかし、農民騒動で、あれの働きがあつたのは事実だ。

アルベルツヒ なに、オイケン殿だけではありますまい。

他に修道院長や代官やのおかげですよ。

それどころか、議員たちは議会も開かれず、自分たちの意見もろくろく聞かなかつたといつて憤慨していると聞いております。

ギュンター （皮肉っぽく）そもそも、どこやらの友達とやらからの情報か？

アルベリッヒ （薄笑いして）ご想像におまかせします。

アルベリッヒ、部屋から退室をしたあと。

隣の自分の部屋で。

おれは、かずかずの言葉で悪意の種をまき散らし、噂話を大げさに、まことしやかな嘘を広げてまわるのだ。

まことしやかな嘘は、本当よりも本當らしく聞こえるもの。

大きな嘘より、小さな嘘という諺がある。

大きなホラは誰も信用しないで、小さなホラには誰もが騙されやすいというが、まことやかな、大きなホラを吹いてやろう。天秤をもつた正義の女神は、もつけの幸い、目隠しをしてござる。

これ以上の暗示はあるまい。

何が正義で、何がそうでないか、わかるものか。

そんなものは、状況次第でコロリと変わる。

さながら、今日と明日の天気のようにな。

誰もが嫌がり、疑いだすとキリがないような、しんどいことを、敢えてやらかすのだ。

慎重にな。
こつそりとな。

ギュンター、部屋の中を歩きまわりながら。

ギュンター　どうやら議員たちが、オイケンに嫉妬をして反感を持っているのは、確かに
ようだ。

悪くはないぞ。

むしろ、慶事というべきだ。

それもしごく当たり前のことだ。いつこうに、構わぬことだ。

むしろ、おおいに奨励すべきことだ。

オイケンに対して、やつかみ半分、憎しみ半分。

（間をおいて）だが待てよ、もしもアルベリッヒの言うことが、本当だとしたら？
オイケンが、レオンハルトの件で何かの情報を得たり、万が一、真相を知ったとした
ら、これは問題だ。

事が明るみに出ると、オイケンに対する議員たちの反感が、一氣におれへの非難に変
わってしまう。

そうならぬうちに、手を打たねばならぬ。

心配ごとが現実のものとならぬうちに。

手遅れとならないうちに。

第六場

警護隊の兵舎の近くの夜の路上。

素性の知れぬ若い女が、クラウスに誘いをかける。

クラウス　なぜおれに、なれなれしく言い寄ってくるのだ？

若い女　（黙つたままで、なよなよとした仕草）

クラウス　誰かに頼まれたのだな？

（金を見せて）これをやるから、正直に言つてみないか？

若い女　（いやいやをして首を横に振る）

クラウス　（もう一枚、金を出して）これではどうかね？

若い女　（金を受け取る。そのうえで何ごとか囁くように言つて、そのまま闇の中へ立ち
去る）

クラウス うむ、アルベリッヒか……その背後には……。

以前に、フランツと共に訪問した時の会話のなかで、殿下が、ちょっとしたアイデアが、生まれそうだと言つたが。

それがこれか。

辻君をつかわして、ストア学派、つまり禁欲主義を唱えるおれをたらし込んで、あとで大笑いして楽しもうというわけだな。何という底意地の悪い、俗悪な根性だ。

第七場

朝のうちの貴族の館の一室。

オイケン殺害の報が入る。

貴族1 オイケン卿が殺された。

貴族2 昨夜の夜中のことだ。

宮殿を辞して、自分の屋敷へ帰る途中で襲われた。

貴族3 警護役の家僕とともに、ほとんど抵抗する暇もなくやられたようだ。

貴族4 刺客は、二手に分かれて放たれている。

オイケン卿の屋敷では、奥方をはじめ家の者たちがみんな殺された。

貴族5 真夜中に、屋敷のある方角から、女たちの悲鳴が聞こえたという。

貴族1 誰が刺客を放ったか、見当は付いている。

貴族2 だがな、いまは黙つてろ。

ギュンターの離宮に通じる道のかたわら。

道化 オイケン卿が殺された。

あのように見識があり、誠実で気骨のある、誰にも代えがたいお方が。しかも奥方と侍女に加えて、二人の幼いお子たちまでが殺されるとは。

第八場

離宮の一室。

ギュンター、鎖帷子の胴着の上に、緋色のマントをまとっている。

部屋の中を歩きまわりながら。

ギュンター 深々と、うつとうしい暗闇が眼前にひろがる。

おれには、永遠の不眠の刑を。

つき添う黒い影には、不死の苦しみの刑を。

(問) だが待てよ、このわざとらしい詠嘆や大言の裏には、いやらしい作意がある。自分自身を、いやらしく捏ね上げるのはよせ。

すなおに横暴をきわめるのだ。

(問) だがおれは、憎しみのために人を殺そとは思わない。

むしろ、誰かを憎んで、そのことだけで誰かを殺すことができたらと思う。

そのことで、鬱屈していた気持ちが晴れるやも知れぬ。

ところが、猜疑というものは、どのような放埒や愉悦をもつてしても、消え去ることはない。

底の知れぬ猜疑と不安の、その果てには、ただただおぞましい寂寥と孤独があるばかりだ。

仕切りの分厚いカーテンの陰からそやつが、不気味な青白い顔をのぞかせる。

(やや昂ぶりながら) いま少しその醜い顔を突き出せ、竜を退治したジークフリートさながらに、このおれが退治してくれよう。

——幕——

第四幕

第一場

宮殿の一室。

ギュンターとカロリーネ、立つたまま向き合う。

話し合う言葉のはしばしから、明らかに二人の関係の冷え切っているありさまが感じられる。

ギュンター そちがおれを、軽蔑しておるのはわかっている。

カロリーネ（無言のまま）

ギュンター 軽蔑は憎しみよりも、たちが悪い。

おれは、そちがおれを、軽蔑していることを知っている。

その目つきから、口もとから、体からな。

カロリーネ わたしは、あなたを軽蔑しているけれど、憎悪はしておりませぬ。

軽蔑という言葉があまりにも、完全であるゆえに。

ギュンター 思っていたとおりだ。

しばらくのあいだ、二人とも沈黙が続いたあと。

カロリーネの方から。

カロリーネ わたしにとつて、救いはただ一つ、子どもができなかつたこと。

ギュンター 二人のあいだで、意見が合つたのはただ一つ、そのことをだけだ。

カロリーネ これから、わたしをどうなさるつもり？

ギュンター 姦通の咎で罰する。

カロリーネ その咎は、わたしには当たらないわ、身に覚えのないこと。

それは、あなたが、よく知つていてるはず。

わたしは、あなたの新しい愛人を知つていてる。

ギュンター おれは、おまえの秘密を知つていてる。

異端のフス派の仲間のよからぬ連中たちを知つていてる。

カロリーネ わたしには、自分の心に対して、やましく、恥じることは一つもない。

ギュンター それはどうでもよい。

そちを、荒山の砦の城へ送り届ける。

カロリーネ そのうえで、姉上のイザベル様のように……。

ギュンター、警護兵をよびだす。

あたかも待機していたように現われた警護兵、カロリーネを連れ去る。

カロリーネ、連れ去られながら。

イエス・キリストさま。

どうか、わたくしから離れないでください。

やさしい聖母さま、どうか私にそのみ手を差し伸べてください。

第二場

新しく侍従長に、取り立てられたアルベリッヒの新しい部屋。
成金趣味の、ごてごてした飾り物が見える。

アルベリッヒ いろいろと、努力を重ねてきた末に、手に入れた侍従長の役職だ。
粗略にはあつかえぬ。

思いは貴族さながら、出自は賤民と同じくだ。
構うものか。

何よりも、機会を逃さずに蓄財に励むことだ。
地位と蓄財、これ以上の組み合わせはあるまい。

蓄財の幾分かは、殿下にもおすそ分けだ。
何しろ、いまや殿下にも入り用不可欠のしろものだからな。

ぎょうさんのお妾さんや、競技場での接待やら、試合の騎士たちにつかわす袖の下、
といった具合にな。

それで八百長試合がうまく収まる。

ご同慶のいたりだ。

法と正義の女神ユスティティアは、目隠しをしたまま、今やコクリと唇寝のきなか。
おつと、天秤がいささか傾きかけてござる。

(少し間をおいて)さて、これから先、何から始めるか、ここが思案のしどころという
もの。

自分を頼め、そして自信を持つのだ。

弱みを見せると、運命に付け込まれる。

しばらく黙りこんであと。

どす黒い悪意よ。

顔を出すな、引っ込んでおれ。
まことしやかな善人面よ、前へ出ろ。

野心から野心へ、人間の本能にしたがうまでだ。

第三場

離宮の一室。

ギュンター、アルベリッヒ、近くによつて密談を始める。

アルベリッヒ、少しづんざいな口調になる。

アルベリッヒ ギュンター殿下、いまこそわが領邦においては、人頭税や住民税、また売上税などの税率を引き上げるべく、検討すべき時ではありませんか？

ギュンター 国庫はそんなに窮乏してはおらぬ。

税制だけは触るな。

アルベリッヒ そうばかりも、言つておられますまい？

もう長いあいだ、百年ものあいだ、税率は据え置いたままです。

そろそろ、税率を上げて、殿下のご威光を示すべき頃合いではありますか？

「君主ギュンター殿下が、それを望んでおられる」と告げ知らせるのです。

日ごろの馬上試合や鷹狩りの費用に必要ではありませんか？

ギュンター 民衆には、門前の広場や草原で派手な馬上試合を見させて、ガス抜きをさせるのがよい。

アルベリッヒ 仰せのとおり。

民意などは意のままに、でっち上げたり無視したり、どうにでもなるものです。どうせ彼らは、自分たちと同じレベルのものごとでしか、理解できないのです。

増税がダメなら、教会税のピンハネというのはどうです？

これもダメなら、いまひとつ取つて置きの妙案があります。

ギュンター それは何だ？

アルベリッヒ 近ごろ流行り始めた「免罪符」の販売です。

ギュンター それはローマ教皇の専売ではないか？

アルベリッヒ もちろん「免罪符の発行」は教皇のものでしようが、「販売」はそうではありますまい？

もっぱら、教会のドミニコ会修道僧が担つておりますが、なに、手はあります。

その修道僧たちを抱き込んで、売り上げを誤魔化すんです。

何しろ、何を隠そう、すでに彼ら自身がやっていることですからな。

わたしが間に入つて、うまくやります。

信心深い町衆の女房や、農村の女たち、安息日の告解がぎょうさんある、欲深い商人たちを相手に売りつけるんです。

いつたん動き出すと、あとはもう勢いのままです。

ギュンター まことに教会というところは、信心深くて善良な臆病な者たちを、嘘とハッタリで脅しつけたうえで、煽つたり、焚きつけたりして、「免罪符」とやらを売りつけ、さんざんに儲けようつてわけか。

アルベリッヒ そのとおりで。

しかしわれわれも、その手に乗らないって法はありますまい？

ギュンター そして手数料は、そつくりそのままその方の懐へか。

アルベリッヒ とんでもありません。

殿下のお気に召すままというわけでして。

わたしには少しばかりのおすそ分けを。

ギュンター 貴族たちや、住民のあいだから、いつか非難の声が上がることはないかな？

アルベリッヒ ご心配には及びません。

何しろ、彼らのお内儀や娘たちがお得意先ですからな。

あまりにゆき過ぎた場合には、殿下みずからが、ここぞとばかりに介入されて、範を示して見せるのです。

殿下のご威光が、きわだつこと間違いなしです。

ギュンター （アルベリッヒを近寄らせて）よいか、物事を、あからさまに行つてはならぬぞ。

アルベリッヒ 承知しております。

ギュンター できる限り、ひつそりと目立たぬように。

万事は控えめに、自然とことが始まつたようにな。

第四場

霧が深く立ち込める、警護隊の兵舎の近くの夜道。

フランツとクラウスの二人。

フランツ 後をつけてくるのはわかっている。

クラウス 誰だ？

やや、間があつて。

道化 オイケン卿を知る者だ。

フランツ オイケン卿を知っている者だと？

クラウス われわれを誰だか知っているのか？

暗闇の中から声がして黒い影が現われる。

道化 （芝居じみた声で）知らずにことが済むものか。

クラウス その声は、道化の声だな？

フランツ そのようだ。いちど聞いたことがある。

近寄つて顔を見せろ。

道化、近寄つて、化粧をしていない素顔を見せる。

クラウス きさまが道化か？

フランツ それで、われわれに何の用がある？

しばらくのあいだ、三人の影が道の物陰に隠れて、何ごとか話し合っていたが、やがてそれも終わる。

深く降りてくる夜霧のなか、分かれ道のところで一人と、二人の人影が別れて次第に遠のく。

第五場

宮殿の賄いの召使いの部屋のカールと、その妻のマルタ。

マルタ、洗濯物をたたんでいる。

カール、手持ちぶさたなふうにそばにいる。

マルタ、話題を持ち出すようすで。

マルタ 今年は天候が不順で、小麦が不作でそのせいか、市場に出回る小麦の量が少なく、そのうえ質が悪くて、値段も高くなつてきているわ。

わたしたちは、宮殿の賄いにあずかる身だから、直接かかわることではないけれど。カール 誰かが間に入つて、賄賂を取つたり、仕組んだりの、悪さしているかも知れん。マルタ そのうえ、バターに加えて塩までが値上がりしている。

やつぱり誰かが仕組んでやつているのかねえ？

カール やつてているとしたらきっと、上質の小麦で作つたパンをたらふく喰つてやつにちがいない。

一人か二人か、何人か知らないが、そのうちの一人は多分……。

マルタ （口に指を押し当てて）おまえさん、めつたなことを漏らすんじゃないよ。

カール （やや小声で）一人は例の成りあがりもの。

もう一人は、身分のたいそう高い……。

第六場

以前のギュンターとアルベリッヒの話し合いから、かなり日が経っている。かつて、イザベルとコンラートが住んでいて、今はギュンターの物になつている広壯な館の部屋。ギュンター、アルベリッヒが向かい合う。

アルベリッヒ、変わらずぞんざいな口調。

ギュンター（くつろいだ口調で、アルベリッヒに） その方、近頃ずいぶんと羽振りがよさそうだな。

アルベリッヒ 殿下のおかげをもちまして。

恐れながら、殿下から少々おすそ分けを、頂戴いたしております。

ギュンター（アルベリッヒに身を寄せて） 例の件はうまくことが運んでいるようだな。

アルベリッヒ 「免罪符」のことですか？

ギュンター そうだ。いつたいどのように仕組んだのだ？

アルベリッヒ いえ、なに、何人かのドミニコ僧の傍へ寄つて、誘いをかけてみただけのことですよ。すると溜池の桶を抜いた池水が、じわじわと静かにいつの間にか、そのくせアツという間に、田畑に広がつたまでのことです。

ギュンター よいか、目立たぬようにな。

アルベリッヒ 心得ております。

何しろ、お墨付きの坊主たちがやつてていることですから。

あまりのときには、殿下のご威光で、範を示されることですな。

ギュンター わかつておる。

だがしかし、そのほかにもいろいろと。

小麦や塩やら、何やかやといたしておるな？

アルベリッヒ 恐れ入ります。

ギュンター いたずらにおのれの才を頼んで、出過ぎた真似をしてはならぬぞ。

アルベリッヒ（神妙に） 承知いたしました。

ギュンター 何ごとも目立たぬよう。

その方が表に出ではならぬぞ。

アルベリッヒ 心得ております。

（しばらくして、部屋の中を見渡しながら） それにしても、ずいぶんの荒療治でございましたな。

ギュンター コンラートのことか？

アルベリッヒ サようで。

ギュンター やつめは、おれに手をかけようとしやがった。

(部屋を見渡して) その報いがこれだ。

飾り付けや調度類も、没収のときのままにしてある。

やつめ、まったく豪勢な暮らしがしていたものだ。

アルベリッヒ その他にもいろいろと。

ギュンター ヴァイスバッハのことか?

アルベリッヒ サようで。

ギュンター 貴族たちを統率するために、やっていることだ。

それぞれが、監視し合うように仕向けて、密告をさせる。

やがてそれぞれが、疑心暗鬼と不安と混乱に耐えかねて、おれを頼ってくることになる。

アルベリッヒ 妙案です。

まことにもつて、ギュンター殿下ゆえにできることでありましょう。

ギュンター そうかね。

おれよりもむしろ、そちの方が考え出しそうな気がするがね。

アルベリッヒ いえいえ、とてもわたしとき者の及ぶところではございません。

レオンハルト殿の件については、ご存じのとおりでございます。

ギュンター あれは、その方の仕業であろうが。

アルベリッヒ とんでもありません。

あえて言うなれば、あれは暴れ馬がしでかしたことですよ。

馬が厩舎から逃げ出すことはよくあることです。

ギュンター そうだな。

アルベリッヒ ええ、ええ、それにレオンハルト殿の、運が悪かったのでございましょう。

となると、強いて言うなれば、運命の女神たちの仕業というべきかも知れません。

ギュンター (苦笑いをして) そうかも知れぬな。

アルベリッヒ それにしても、身辺がだいぶスッキリしましたね。

ギュンター オイケンのことか?

アルベリッヒ サようで。

ギュンター あれは、その方が持ち込んできた仕事だ。

レオンハルトのことを、いろいろ探っているらしいとな。

それに、やつめ、いきなりやってきて、このおれに押しつけがましく意見など、無遠慮にものを申しおつた。

アルベリッヒ まったくです。

貴族議員たちに対しても、同じように振る舞うのですから、彼らに反感を持たれる

羽目におちいった。

ギュンター その方も、下心はともかく、二心を持つてはならぬぞ。

アルベリッヒ 勿論じゅうぶんに、承知をしております。

これからは、誰にも煩わされることなく、殿下の思われるままにことが運びましょ
う。

ギュンター その方が、騒ぎを持ち込まぬ限りはな。

アルベリッヒ （話題を変えるように） それでも、先日の馬上試合の殿下のご活躍には驚かれます。

会場中が鳴りどよめくたびに、殿下のご威光を目の当たりにするようでした。

殿下の巧みな槍さばきに、何人かは、あのようにぶざまに。

ギュンター 鼻薬をかがせてある。

アルベリッヒ 鼻薬が効かない者には？

ギュンター 薬が効かないやつには、落馬したあとも容赦しない。

こここのところの、見極めが大切だ。

できるだけ効果的に、残忍な場面をこしらえるのだ。

観衆を喜ばせるためにな。

見え透いた演出とわかっていても、やつらめ、大喜びだ。

アルベリッヒ それが、小麦にありつけないネズミたちや、一揆騒ぎを起こしそうな連中に對して、格好のガス抜きになる。

ギュンター だがな、その方が言うネズミたちに気をつけることだな。

群がつて騒ぎ出すと面倒なことになるぞ。

アルベリッヒ 心得ました。

二人の話はまだ続く。

第七場

数日たつた、離宮の部屋の中。

ギュンター、鎖帷子とマントを着たまま、ソファに腰掛けてうたた寝をして
いる。

しばらくして、目を覚ますと、部屋の片隅に黒い人影がうつむいて椅子に座
つているのを見かけて驚く。

恐ろしさのあまり、体を動かそうとしても、金縛りにあつたように動かせず

にいたが、やつと氣を取り直して声をかける。

ギュンター 顔を見せよ。

おれに何の用があつてきた？

人影、無言。

沈黙がつづく。

ギュンター どうして黙っている？

ややあつて。

ギュンター 何のために、そこにいる。

答えぬならそれでもよいが、早々にこの部屋から立ち去れ。

人影、応えるようにゆっくりと身を起こして、出口の扉のほうへ向かう。

ギュンター、懸命に体を動かそうとして、目が覚める。

人影も消えている。

ギュンター （身を起こして）夢だったのか。

（間をおいて）いや、夢ではなさそうだぞ。

おれは確かに、うたた寝から一度は目覚めて、その時にあの黒い影が腰掛けているのを見かけたのだ。

そしてそれが出口から出ていくのを見たのだ。

そして、それからもういちど眠り込んだのだ。

きっととそうにちがいない。

それにしても、夢か幻か、あるいは生身の人間か、薄気味の悪いものを見たものだ。あれが、生身の人間でないとすれば、おれが自分で気づかないでいる、心の奥底深くにひそむ、黒い恐怖が形となつて現れ出たか。だがな、名にし負うギュンターだ、何も恐れたり、案じたりすることはない。運命の女神たちに、付け込まれるような真似はよせ。

ギュンター、なおも思案をつづけるところへ、マルタに案内されて、道化が訪れてくる。

ギュンター（気を変えて機嫌よく）丁度よいところへ参った。

しばらくのあいだ、顔を見なかつたようだが？

して、今日はまた何を仕込んだのだ？

道化 大風呂敷を広げても、包み切れないほどのお節介を。
いや、大ボラをでございます。

大きなホラより、小さなホラをと申します小さなホラほどの、大きなホラを。

ギュンター 何のことだ、してその心は？

道化 大きなホラは誰にでも直ぐにバレまするが、小さい方は、なかなかそのようにまいりませぬ。

ですが、うつかりしているうちに、とんだ目にあいまする。

ギュンター ほかに何を持ち合わせておる？

道化 風呂敷取られて、尻を踏まれる。

ギュンター 何だそれは。

してその心は？

道化 踏んだり蹴ったり。

走つたり、転んだり。

風呂を沸かしたり、風呂を立てたり。

ギュンター 今日は、風呂敷だとか風呂ばかり。

無駄口はもうよせ。

いつたい、大きなホラはどこへいった。

道化 風呂の中で屁をひる。

ホラ、このとおり、ボコボコ、あとはブツブツ。

やや、これは尾籠な。

尾籠と痔瘻は、尻のお話。これでお終いにいたしまする。

ギュンター 無駄な話はやめろ。

こんどは、おれの謎かけだ。

（意味ありげに）おれが、まどろみから目を覚ますと、部屋の片隅に向かい合うようにして、黒い人の影のようなものがきている。な？

道化（すらすらと）目が覚めたつもりがその実、夢がつづいているのです。
遠く離れたギリシャ神話に出てくる、オネイロスのやつの悪戯ですよ。

やつめは、昼間はどこか西の果てにある洞窟の中なんかで、昼寝をしている眠りの神のヒュプノスのまわりを、むなしく揺らめいているが、辺りが夜ともなると、あちらこちらうろつきはじめるのです。

やつめの一族で、夢魔のインクーブスめは、よく寝ている人の腹のうえに、馬乗りに

なって、人を苦しめます。

それで人がうなされて、目が覚めてみると、自分の手を胸の上に組んで、寝ていたと
いうだけなのです。

それで胸が圧迫されたんでしょうな。

わたしなんぞも、ときどきそんな目にあいますよ。

なまじつか、神さまに手を組み合わせてお祈りをしたあげく、そのまま眠り込んで、
とんだ目にあうというわけですね。

ギュンター おれが、声をかけても黙つたままだ。

道化 声をかけたつもりが、実はそうではない。

たとえ相手が答えたとしても、そのように聞こえた気がするだけです。

夢の中では、ことはまるで黙劇のように進みます。

ギュンター 気がついてみると、消えている。

道化 虹も消えるが道理。

夢にせよ何にせよ、現われたものが、どうして消えないわけがありましよう。

来たものが、どうして行つてしまわぬことがありますよう。

わたしの方も、そろそろ消え失せると、言われる前においとま、いや消えるといったし
ましよう。

第八場

離宮を辞して、帰る夕暮れの道。

道化 夕暮れの人影は、長く大きく映るもの。

ギュンター め、そのような影をみて自分を大物と思っていやがる。

伝説の英雄、ジークフリートなどと。

夢の中で、黒い影などと……。

どうやら、守護神も立ち退いたようだな。

貴様の命運も尽きたというものだ。

オイケン卿のかたきを取つてやるのだ。

以前にキリスト教徒の老人が、おれのために、十字を切りながら祈つてくれたことを
思い出した。

殿下のためにもと言つたが、あれが暗示であろうとはな。

我が国の君主が、おまえである必要はないのだ。

猜疑心が強いのは、おまえが臆病で小心者だからだ。

(昂ぶりながら) 執念深い復讐の女神エリーニュエスよ、立ち現れよ。

陰鬱な顔のプルートーよ、地獄の館の門を開けよ。

死神タナトスよ、その黒い衣をきて鎌をもて。

ジークフリートのような、無残な最期を用意するのだ。

(さらに昂ぶりながら) さあ、道化よ。

化粧の下の、作り笑いはよせ。

道化の衣装を脱ぎ捨てろ。

化粧を落とせ。

(口元に指を立てて) おうつと、大声は禁物。

静かに、静かに。

舞台をまわす役目は終えた。

あとは、舞台の裏の方へひつそりと、裏の方へひつそりと。

第九場

ギュンターとアルベリッヒが、コンラートの館で、話し合った日から何日か経つた、離宮の一室。

ギュンター一人、部屋の中を歩き回りながら。

ギュンター アルベリッヒよ、やはりその方は、出過ぎた真似をしおつたな。

何ごとも目立たぬようにと、申し付けておいたはずだが。

先ほど、その方の噂は、おれの網にかかるて、そつこく耳に届いてきおつた。

小麦や塩や、それにバターのことだ。

このまま放置していると、おれにもあらぬ疑いがかけられそうで、おれの身が危うくなる。

それに、陰険で狡知に長けたその方だ、おのれの都合で何をしゃべり出すか、わかつたものではない。

何しろ、ニーベルングだからな。

民衆に呼ばれているのは、もちろんおれではなく、その方だ。

それでさつそく、手遅れにならぬうちに、手を打つことにした。

一揆騒ぎよりこのかた、何かと騒ぎたがる民衆に、その方をくれてやろう。

そのうえで、小麦や塩などの値段を元通りに戻してやれば、この件からおれの姿は、すっかり隠れおおせるつてわけだ。

だがこれには、ちょっとした仕掛けと工夫が必要だ。

アルベリッヒよ、さぞかし、ぎょうさんの町の衆たちから、怒りと憎しみを受けることになるだろうよ。

第十場

離宮の一室。

カールに案内されて、クラウスと鷹匠のミヒヤエルの二人、部屋に入る。

ミヒヤエル、鷹狩り用のブーツを抱えている。

ミヒヤエル 新調のブーツを、ことづかつて持参いたしました。

ギュンター それはありがたい。ご苦労だったな。

(クラウスを見やつて) きみも一緒にほおどろきだ。

クラウス わたくしどもは、鷹狩りのお供で旧知の間柄です。

ミヒヤエル わたくしが誘つて同道いたしました。

ギュンター 結構だ。

(クラウスに向かつて) よくきてくれた。

ミヒヤエル 試し履きをなされますか?

ギュンター もちろんだ。

ギュンターが試し履きをしているあいだ、無言のまま、来客の二人、何やら意味ありげに顔を見合わす。

ミヒヤエル (履き終わるのを待つて) 履き具合はいかがでしようか?

ギュンター うん、申し分なしだ、ピッタリだ。

ミヒヤエル それは、ようござりました。

ギュンター こたびは誰がこしらえた?

ミヒヤエル いつもご贔屓の、親方のマルティンでござります。

クラウス よくお似合いだ。さすがに新品だ。

いや、これはおかしなことを申し上げた。

ギュンター (機嫌よく笑いながら) なに、構うものか。

それよりも、せつかくだ。

久しぶりに、きみと一勝負とゆこうではないか?

クラウス そのつもりで参ったのではありませんが、そういうことなら、ぜひにも。

ギュンター、召使いのカールに命じて、練習試合用の武具一式を持つてこさせて部屋のなかで試合を始める。

長剣から始まり、激しく打ち合つたすえに、辛うじてクラウスが勝つ。短剣に持ち替えてしばらく互角に戦うが、バランス失ったクラウスに、覆いかぶさるようにして倒して、クラウスの喉元に短剣を突き付けたギュンターの顔が一瞬、にやついた、残忍な表情が浮かぶが、気を取り直して離れる。

試合が終わって、しばらく体を休めるのを待つて。

ミヒヤエル 殿下、このたびの鷹狩りはいつ頃になさいますか？

鷹狩りに、ちょうどよい頃合いの季節になりました。

ギュンター そうだな、十日後はどうだ？

ミヒヤエル 恐れながら、それでは鷹たちの体の調整が間に合いませぬ。

急ぎ取り掛かりまして、二週間を目途に準備が整いましたら、お知らせいたしますがいかがなものですか？

ギュンター よかろう。

供の者たちには、そのように申し付けておこう。

ミヒヤエルとクラウス、一礼して退室。

第十一場

数日後のこと。

いつも宮殿の馬丁のところへ出入りしている博労のトーマスの、徒弟のルーカスが、アルベリッヒのもとにやってくる。

アルベリッヒ 何だ、親方のトーマスと一緒にやないのか？

ルーカス へい、旦那、きょうは親方と一緒にじやねえんで。

何しろ、親方には、親方の都合つてもんがおありなすんでね。

アルベリッヒ そりやあ、親方の都合もあるうさ。勝手にするがいいさ。

あいにくと、おれはお城の馬の係じやないんでね。

それで、おまえさんの都合は何なのだ？

ルーカス なに、都合つてもんほどのこともねえが、ちょいとこの近くまできたもんでね。

それに、懷具合が少々さびしいもんで。

(何やら意味ありげに) それに旦那、ちょいとしたうわさ話も御座んすぜ。

アルベリッヒ そうかね。それで例によつて、お駄賀のおねだりか?

ルーカス おねだりなんかじゃねえや。

アルベリッヒ (冗談っぽく) ジやあこのおれを、ゆするつもりか。

ルーカス ゆするなんて、とんでもねえ。

何しろ、ちょいとした話を聞き込んだもんではね。

アルベリッヒ どんな話だ?

ルーカス 何ね、今の宰相のディートリッヒさんのことださ。

アルベリッヒ 宰相のディートリッヒがどうした?

ルーカス とくべつに、どうっていうこともねえが、(辺りを気にしながら) 今時分、こんなところではね。

アルベリッヒ どうしようというんだ?

ルーカス 明日の朝早く、いまからおれの言うところへくれば、おれの連れの者が、何かやと聞かせてくれまさア。

ルーカス、アルベリッヒに近寄って、何やら小声で耳打ちをして聞かせる。

アルベリッヒ わかつた。

ルーカス おれの連れの者つてえのは、大変な気短の氣分屋でね。

ちょっとでも、くるのが遅かつたり、約束ごとをちがえると、もうそれつきりつて野郎でね。

アルベリッヒ 承知した。

約束は守るから、そのつもりでいてくれ。

つづいて二人、何かのことで、そそくさとなにごとか打ち合わせをした後に別れる。

第十二場

明朝早くまだ薄暗いうちに、約束した町の通りの外れまでアルベリッヒがくと、いきなり得体の知れない数人の人影が現れて、有無を言わさずアルベリッヒを捕らえて刺し殺し、なおそのうえ、頭部その他を石で打ちのめす。

陽の光が差し込める朝のうちに、アルベリッヒの惨たらしい死体が、宮殿から離れた町の路上の片隅で発見される。

遺体は、胸を刀物で刺し殺されたうえに、辺りの足跡から見て、何人かからの恨みと思われる、石か何かの鈍器のような物による、執拗な暴行を加えられたことが知られる。

このことは、朝のうちに、たちまち町中に知れ渡る。

第十三場

その日の、午後の宮殿の部屋。

ギュンター、何やら思案顔で椅子から立つて部屋の中を行き来しているうちしばらくして、呼び鈴を鳴らして、召使いのカールを呼び寄せる。

一礼をして現われたカールを立たせたまま、横目でみながら。

ギュンター（何かを思いついたふうに）その方の出自どこだ？

カール（おずおずと、しかし何かを探るように）はい、父親の話では先祖は、ここから遠く離れたニーダーラントのクサンテンと聞いております。

ギュンターほほう、よくぞ申した。

クサンテンは、ニーベルングン伝説の英雄、ジークフリートが生まれたところだ。

カール仰せのとおりでございます。

ギュンター（向き直って）あそこ辺りの森の中には、ジークフリートが、宝を守る竜を

退治した洞窟があるはずだが、その方は何か聞いておらぬか？

カール恐れながら、何も存じませぬ。

ギュンターそれは残念だ。

カール恐れ入ります。

ギュンターマルタはどこの出だ？

カールザクセン州のゲッチングンの近くと聞いております。

ギュンターまちがえるな、ゲッチングンは、フランケン州であろう。

カールいえ、ゲッチングンはやはりザクセン州でございます。

ギュンターうむ、そうであつたな。

ハルツ山地の近くだ。

年に一度のワルブルギスの夜に、魔女たちが集まるというブロッケン山がある。

カール よくご存知でいらっしゃいます。

ギュンター （からかい半分に） よもや、女房のマルタは魔女ではあるまいな？

カール （慌てて） 何を仰せられます、滅相もございません。

ギュンター さようか。（笑ったその後、気を変えたように）

その方は、今朝のアルベリッヒの身に起こったのこと、知つておろうな？

カール （恐ろし気に） はい。

存じております。恐ろしいことでございます。

ギュンター あれは、少しばかり才覚のあるやつだったが、小麦や塩のことで、おおぜいの町の連中から恨みを買って、そのためには、みずから身を滅ぼしあつた。おれを扇動して、いや、たぶらかしてといった方が適切だが、いつの間にか自分でたいそうな蓄財をしおつた。

もつとも、その蓄財も没収されて、そつくりそのまま、おれの物になる。

おかげで、馬上試合での大判振る舞いや、大勢の供の者たちを引き連れて、鷹狩りができるというわけだ。

（言い含めるように） よいか、アルベリッヒの一の舞を踏むなよ。

要らざることは、考えぬようにな。

いつさい、宮中で起ることは、見ざる聞かざる言わざるに限ることだ。

カールを下がらせたあと、部屋の中を歩き回りながら。

カールよ。その方は正直者の人だな。

ゲツチングエンは、フランケン州と嘘を吹っかけてみたが、正直に否定しあつた。おれの仕掛けた意図を知らずにな。

あれは、その方を試してみただけだ。

正直は、命取りになることに気をつけるがよい。

いつぞやのヘルマンは、拷問に掛からぬうちに、首謀者が誰か正直に白状し負つた。カールよ。その方はまた、小心者の人でもあるな。

マルタの話になると、慌てて否定しあつた。

だがな、同じ小心者でもアルベリッヒのように、裏があつてはならぬぞ。

第十四場

ギュンターたちの鷹狩りの日の朝。

離宮のテラスに、ギュンターをはじめ、鷹狩りの一行が集まっている。

鷹狩りは、二組に分かれて行われる。

ギュンターの組には、二人の騎乗の貴族と、クラウスがお供をする。

もう一方には、三人の貴族に、それぞれの供の者たちがつく。

ギュンター（テラスから、周辺の景色を見ながら機嫌よく）久しづびりの鷹狩りだ。

目にする野っぱらや、まわりの山々が見事に色づいて、眩しいくらいだ。

ミヒヤエル まことに、よく色づきました。

ギュンター こたびの鷹はなんだ？

ミヒヤエル オオタカでございます。

ギュンター して、仕上がりはどうだ？

ミヒヤエル お待ちいただきましおかげで、よく仕上がりました。

ギュンター うむ、オオタカであれば、獲物も大形のキツネを狙えるかも知れぬな。

ミヒヤエル はい、きっと仰せのとおりになりますよう。

鷹狩りは「王者の狩り」と申します。

このように、鷹狩りのお世話ができますことを、光栄に存じあげます。

クラウス 「王者の狩り」か。

なぜそのようにいうのだ？

ミヒヤエル ほかの狩猟にくらべて、高貴な身分の方々が特に好まれることと、加えてタ

カや、ハヤブサが高貴な鳥とされるからです。

クラウス 鷹狩りや狩猟で、この機会にこうして山野を駆け回って、騎馬の術を高めるこ

とができる。

アルノルト 山野や谷を駆け巡ることで、領内の地理を知つて、領地の管理や防戦のために役立てることも肝要だ。

ギュンター（中庭の、馬や勢子たちのようす見下ろして）それでは、そろそろ中庭に集合して、準備が整い次第出立だ。

やがて、全ての準備が終わり、離宮の警備の者を残して、一行が城門を出ていくのを、カールたちが見送る。

第十五場

同じく、ギュンターたちの鷹狩りの日の朝。
貴族たちの館の廊下。

貴族たち、少しばかり苛立つている。

貴族1 このところ、またもや隣邦の動きが怪しいらしい。

貴族2 攻城戦用の大砲を取得するなど、軍備を強化しているらしい。

貴族3 何人かの、諜報の者たちが入ってきているとの噂だ。

貴族4 宰相のディートリッヒ閣下は、どの程度まで情報を持っているのだ？

貴族5 やはり常備の軍隊を持つべきではないのか？

警護隊だけでは余りにも心もとない。

その都度、傭兵を呼び寄せるには時間がかかりすぎる。

貴族1 かといって、常備軍を備えるほどの国力を、わが国は持たない。

貴族2 宰相は、外交手段に頼ろうとしているが、わが国の内情を相手に知られているのでは、効果のほどは期待できない。

貴族3 一国のあるじが、情勢をわきまえず、馬上試合にうつつを抜かし、そして今日はまた、大勢を引き連れての鷹狩りだ。

貴族4 英明な先君の、オットー公がおられたならばなあ。

第十六場

ギュンターたちが、打ちそろつて鷹狩りに出かけて、二時間ばかり経った昼近く、並々ならぬようすのアルノルトの早馬の二騎が、宮殿の宰相の元へ駆けつける。

アルノルト 大変です、閣下。

ギュンター殿下が、狩りの途中、何者かに襲われて、お亡くなりになりました。

ディートリッヒ (驚いて) ギュンター殿下がお亡くなりになつただと？

何んとしたことだ。

(相手を急かして) いま少し詳しく話されよ。

アルノルト はい、われわれ一行が狩場の、広い草原と森が見渡せる場所に着いて、間もなく殿下は、先に立つて、獲物を野原へ追い出すために、森のなか深くへ馬を乗り入れられたのです。

ディートリッヒ 貴殿もクラウスも、他の警護の者たちも、お側におらなかつたのか？

話の途中に、騒ぎを聞きつけたホルスト、警護隊の指揮官ヴァルター、および連邦議会議長シュヴァルツほか書記官たちが集まる。

アルノルト 森の中に入つて、しばらくの間は一緒でしたが、殿下はいつものように、われわれを遠ざけて、独りを楽しむかのように、犬を連れた勢子たちからも離れて、獲物を狩り出そようと、森の繁みの奥へ駆けていかれたのです。

ヴァルター それから？

アルノルト 殿下のお姿を探し求めながら、狩りを進めていたところ、やや離れた谷あいの方角から、突然、殿下の甲高い悲鳴が聞こえたので、わたしと、間近くにいたクラウスが急ぎ谷あいに駆けつけてみると、背中から槍を突き刺されたギュンター殿下が、落馬しておられたのです。

そばによつて、わたしどとクラウスが、呼びかけると、瀕死の殿下が、ひと言「ハーゲン……」と言いかけて息絶えられた。

シユヴァルツ うむ、「ハーゲン」と……。

ヴァルター 犯人の姿は？

アルノルト わたしどもが駆けつけた時には、すでに辺りには、まつたく人の気配はしなかつた。

ディートリッヒ 急ぎ、迎えの者たちと、犯人の探索の者たちを差し向けねばならんが、現場ではいま、どうしているのだ？

アルノルト クラウスと、他の貴族たちは殿下のお側に、警護の従者の何人かは、犯人の探索に当たつております。

話の途中、ディートリッヒ一人、席を立つて、窓際まで進み、独り言のようにつぶやく。

ディートリッヒ うむ、最後の言葉に「ハーゲン」か……。

ニーベルングンの伝説、そのもののようだな。

ディートリッヒ、再び協議を続けるために、席に向かいかける……。